
異世界冒険譚

Diabolus

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界冒険譚

【Nコード】

N2409L

【作者名】

Diabolus

【あらすじ】

交通事故によって死んでしまった主人公。しかし、それは神の弟子が起こした事故だった！？主人公はなぜか神に謝られ、たくさん
の世界へ冒険する。

プロローグ

プロローグ

「うゝ学校、学校。」

今、駅に向かって全力疾走している俺、山崎涼太は専門学校に通うごく普通の学生、ちよつと違うところをあげるなら、オタクだつてところかな？

「つて！そんなことかんがえているばあいじゃねえ！急がないと遅刻しちまう！」

そんなことをしている間に、目の前の信号が赤になってしまった。

「あつ！クッソゝ。ここの信号長いんだよなゝ。」

仕方がなく息を整えながら信号が青になるのを待っていると。

「うん？なんだ？」

トラックが交差点に入ってくる。そこまではいい。
が、どんどんスピードを上げて歩道にいる俺目掛けて走ってきた！

「ちょっ！おま！？」

避けようにもトラックはもう目の前に迫ってきている。
俺は、世界がゆっくりになっていくのを感じた。

「これは…まさか神速か！？まさか俺には御神の剣士になる才能があるのか？」

まあ、そんなわけはない。
これは走馬灯というやつだろう。

「あゝあ。まさかこんなところで死ぬとはな。まだやり残したゲームもあるし、おとぼくの新しく出るのも欲しかったのに。ん？運転手のおっさん寝てんぞ。」

居眠り運転かよ。

……母さん今まで迷惑かけてごめん。

そんな思考とともにトラックは、俺に激突した。

プロローグ（後書き）

こんにちは、作者です。

この作品はとあるサイトで投稿していたものですがこちらでも投稿しようと思い投稿しました。

駄文ですがよろしく願います。

プロローグ2

「…お……き……じゃ。」

「……めざ……のじゃ。」

…なん…だ？うるさいな。こっちは死んじゃったんだ。もう…少し
ゆっくりさせてくれ…

「おいおき…のじゃ。」

ん？何で死んじゃったのに考えてるんだ？まあいっかもう少し寝か
せてくれ。

<こら！さっさと起きんか！>

「うお！！」

びっくりした！まじでビビった！いきなり頭の中に声が響いてくる
から。

「ん？…ここはどこだ？」

俺がいた部屋は、いや部屋ではなく場所は、どこまでも白い空間だった。

（なんだここは？まるで2次創作で神が出てきそうな場所は）

「ここは神界と人間界の狭間の世界じゃよ。」

「うお！？なんだあんたは！？」

俺の目の前には、アルバス・ダンプルドアと同じくらいの髭をたくわえたおじいさんがいた。

「だから神じゃよ神。」

俺は、テンプレで黄色い救急車を呼ぼうとしたが、やめた。なぜか服はあるのに携帯などを入れているカバンがない。なので目の前にいる自称神に聞いてみた。

「あのすみません、電話を貸してくれませんか？」

「ちょ！？待ちたまえ。君はその携帯で何をしたいんじゃない？」

「そんなの救きゅ…じゃなかった。精神kじゃなくて家に連絡を入れるためです。」

「2回なんか言いかけたよね！？……つごほんとにかく君がなんと
言おうとわしは神なんじゃ。」

まあ、わかってたんだけどね？トラックにぶつかられたら運が良く
ないと普通死ぬし。ちなみに俺は悪いほうだと思う。

「で？その神様が俺に何のようですか？」

「ふむ…それが…のう？」

「なんですか？」

本当に何なのだろうか？そう思っていたら急に神様が頭を下げてきた。……ってうおい！！

「すまんかった。君が死んでしまったのはこちらのミスじゃ。」

やっぱりか……普通神様は人間には会わないだろうから何でいるのかは予想はしてたけど。まさか本当にテンプレどおりになるとは……

「あの……頭を上げてください。それで？どうしてこんな事になったんですか？」

「実はのう……」

理由はこの神様の弟子の女の子が睡眠の魔法を練習しているときに、俺のいる世界にその魔法が当たってしまったらしい。

この神様は、何とか世界全体に影響が及ばないように防いだが少し遅かったらしく、俺を轢いたトラックの運転手に当たってしまったのだそうだ。

理由を聞いて俺はキレた。

「はぁ！？じゃあこんな事になった原因はあんたの弟子なのか？何でここにいない！？」

「…いやぁ…本当はここで君に謝らせたかったんじゃが彼女は最高神様の娘で…」

「最高神の娘だかなんだか知らないけどふつうに謝らせにこいよ」

「わしも来させたかったんじゃが最高神様が『彼はロリコンなので娘に合わせたらけがされています。』とかいって。」

「ちょ！？何で神界にまでそんな情報がいつてんの！？つか俺はロリコンじゃねえ！前原圭一……いや、Kと同じのオールジャンルだ！！！」

全く失礼な、人をロリコン呼ばわりするとは俺はyesロリータn
oタッチだ。

「まあまあ。落ち着くのじゃ。謝りにくるのは置いておいて、とりあえず君はこちらのミスで死んでしまったわけなのじゃし。責任を持つてきみのことをなんとかしよう。」

「本当か!？」

「まあ、規則で君の事を生き返らすことはできなので転生をさせてあげよう。」

魔法少女リリカルなのは月

トラックに轢かれた事によってであった神。

死に別れてしまった俺の家族

出会いは別れを生み

別れは出会いを生む

そんな世界で俺は新しい世界に転生した

魔法少女リリカルなのは月……はじまります。

某県 海鳴町 山の中 午後23…00

暗い山の中、空中に1つの魔法陣が現れる。

バサア

その魔法陣から大きな翼ができて何かを包むように閉じる。

バサア

その翼が開くと中には5歳児くらいの長髪の男の子が出てきた。

一見すれば女の子と間違えそうな顔、すこし青い白い髪の毛、そして中国の服を基準とてさらに豪華にしたような白を強調した服、だがそれよりもっと少年にはおかしな特徴があった。

それは背中に翼があることだろう。そんな少女にも見える少年は憂いを帯びた顔をして口を開いた。

「ここは魔法少女リリカルなのはの世界……か」

??? side

はい、やってきました。魔法少女リリカルなのはの世界！

イヤーここがあの海鳴町なんですね。

え？俺ですか？お久しぶりです山崎涼太改め高科雪人^{たかしなゆきと}です。

あれからいろいろあってこの世界に転生？させてもらったんですよ

ちなみに今の俺の姿は転生前^{ユエ}のダサイ姿じゃなくて、なななんとカードキャプターさくらの月と同じ姿なんですよ。

あつそうだ！せっかく異世界に来たんだから何か言おう。何がいいかなー・・・・・・・・そうだ仮面ライダーディケイドの台詞にしよう！では言いますよーせーの！

「ここは魔法少女リリカルなのはの世界・・・・・・・・か」

イエーイおめでとー。え？うざいですか？どうもすみません。まあ異世界にきてテンション上がらなかったらおかしいでしょ。たぶん。つか、暗いな。まあいいか、とりあえず今日はここで寝よう。

「トレース・オン」

俺は、寝袋を投影したが、

「あれ？この寝袋、中スカスカじゃん」

そうなのだ。数ある2次創作の中で万能の投影は俺だと武具しか投影できないらしい。まあ使ってもまだ魔力が足りないから、宝具は投影できないと思うけど。

「まいつか、地面で寝るよりましだし」

俺は綿の全く入っていない寝袋に入り夢の世界に・・・・・・・・

「なん・・・だと・・・？」

全く入れない・・・やはり布団かベットでないと眠れん。枕もない
しどうしよっか？

「・・・・・・・・・・はっ！そうだいいスキルがあった！」

みんなには何の事だかわからないだろうから説明しておく。俺は世
界のどんな魔法、魔術、技、スキルを使えるのだ！

そして今使うスキルは、ある世界の主人公・・・・・・・・・・射撃が得意
で、いつもテストで0点ばかりとって、勇気があるんだかないんだ
かわからなくて、昼寝が大得意の・・・・・・・・・・そう野比のび太のス
キル

「眠りお昼寝大好きの国への扉」

真名開放とかないけど気分です。言ってみただけなんです。
では、おやすみー

魔法少女リリカルなのは月（後書き）

ハイ！来ましたよ魔法少女リリカルなのはの世界。

主人公はこれからどうなっていくのか！？

それは読者様の目で見て頂きたい。

それでは感想などがあれば投稿してください。それではこれからもよろしく願います。

主人公能力表

名前 たかしなゆきと 高科雪人 本名 山崎涼太

身体年齢 5歳

容姿 カードキャプターさくらの月ユエの髪を雪兎と同じくらいの長さにした容姿。タイトルユエの月もここからきている

能力

1. 魔力、気、霊力、妖力、頸力、など全ての力が使え、使えば使うほど強くなる。

今の魔力は、衛宮士郎よりも少ない。他の能力も1話などに出てくる最初の敵より弱い。

全ての能力にリミッターがついていて、リミッターをつけて戦う。

2. 全ての世界の魔法、魔術、技、スキルなどが使える。

これのおかげで魔力などがなくても、スキルや技だけで十分に戦える。

3. 不老

いわずと知れるこの能力。5歳で止まるわけではなく20で止まる。ちなみに、不死ではない。

4. 肉体変化

肉体の年齢、性別、筋肉の質などを変えることができる。

5. ????

まだ不明

魔法少女リリカルなのは月 2話

やってきたリリカルなのはの世界

そして出会った後の魔法少女、

やっぱり彼女は優しい子で……

そんな彼女を俺は助けたい

魔法少女リリカルなのは月……はじまります。

y u k i t o s i d e

「んう……ふわぁ……よく寝た……さてど、どうすっかな」

俺は起きると今後のことを考え始めた。

「とりあえず家とお金と住民登録かな？」

あの神はそんなことはやってくれなかったし。
とりあえず、お金がないと何にもできないからな……

「よし！これで行こう」

俺は1本の木の前に立ち手のひらとひらを合わせる。
そして離れた両手のひらを木に叩きつけるように当てる。

バチィ

電気が走ったような音と光が出て・・・・俺の手の中にはダイヤモンドが握られていた。

「うわぁ・・・・マジでできちゃったよ・・・」

そのあと、俺はとりあえず何個かダイヤモンドを練成し海鳴町の宝石店に持っていった。子供が持ってきたので驚いていたが、特に問題はなくお金に換えてもらった。

俺はそのお金をもとに、まず銀行の口座を作りパソコンとホテルに泊まったりご飯食べたりする代金以外すべてを預金した。

そのあと、俺は昼ごはんを食べてから安いパソコンを買い、服を買ってからホテルにチェックインしに行った。

ちなみにさすがにホテルは子供の姿では泊まらせてはくれないので
肉体年齢を変え大人の姿になってですけど。

住民登録？市役所の職員全員に高科雪人という人物がいるっていう
幻術をかけて住民票も作ってきました。

「さてと、これからどうすっかな？翠屋でも行くか。っとその前に」

俺は、自慢できるような長い髪をばっさり切った。
買ってきた服に着替え翠屋にレッツゴー！

「ここが翠屋か・・・」

俺は、店の中に入ってシュークリームを注文した。
やはり士郎さんはこの時期は入院しているらしく、高町家の人は桃
子さん1人だった。

「これが・・・あの翠屋のシュークリーム・・・パク・・・
・・・美味しい！」

やばい。なんだこれすごいおいしい。うまく表現できないけど。

俺は翠屋のシュークリームに満足しながら店から出た、

「ん？あれは・・・」

ホテルに帰る道に公園があり中を見ると高町なのはっぽい女の子が一人でなんか暗い雰囲気だった。

とりあえずは話しかけてみるか

「ねえ。君、1人？僕、やま・・・高科雪人って言うんだ。君の名前は？」

「ふえ！？わ、わたしはたかまちなのはっていうの」

「始めましてなのはちゃん。僕のことはユキトでもユキでも好きに呼んでいいよ。」

「はじめましてなの。ユキくん」

よかった～高町なのはだったか違う人だったらどうしようかと思っ
たよ。そういえば俺久しぶりに女の人（なのはちゃんは女の子だけ
ど）と話したの久しぶりなのにあんまり緊張してないな。やっぱ
り歳が離れてるせいかな。

「どうしてなのはちゃんは一人なの？お母さんは？」

「おかあさんはおみせががいそがしいって」

「そっか、じゃあお父さんは？」

これが聞きたかった。

俺ならきついで少しづつなら回復できるだろうし。

俺の質問なのはちゃんは泣きそうになりながら

「おとうさんはおしごとちゅうにけがしちゃっていまびょういんにいるの」

「・・・ごめんね悪いこと聞いちゃった。」

「ううん！！いいの！」

俺はそれから色々なことを聞いた。

家族のみんながあまりかまってくれないこと、お兄ちゃんがいて今イラついていて怖いこと、好きな遊びや、好きな食べ物、話しているうちなのはちゃんはどんどん笑顔になっていった。

とりあえずは、原作とあまり差異がないこともわかった。
ここから少しずつ変えていこうかな。

「ねえ、なのはちゃん。これから、君のお父さんのお見舞いに行か

ない？」

「おとうさんの？」

「そう。君のお父さんに君の元気をわけに行こうよ！」

「そしたらおとうさんげんきになるかな？」

「うん！きつと元気になるよ！」

「じゃあ、いく！わたしもなにかじぶんにできることをしたいの！」

やっぱり高町なのと言う人間は強くて優しいなんとかstsmいたいな魔王にはならないようにしたいな。

そんなこんなで高町士郎のいる病室に着いた。

さて、ついたはいいが、何の魔法を使おうかな？徐々に回復していく魔法がいんだけど。できれば士郎さんにもばれたくないし・・・よし決まった

なのはちゃんが士郎さんから目を放した隙に小声で呪文を唱えた。

「リジエネ」

士郎さんの身体が軽く光ったあとは何も変化がない。
たぶん大丈夫だと思うが・・・

「なのはちゃんもう暗くなってきたから帰ろうか？」

「うん。わかったのおとうさんはやくよくなるといいな。」

「きつと大丈夫だよ。」

そんなことを話して遊ぶ約束をしてから俺たちはそれぞれの家に（俺は、ホテルだけど）帰っていった。

ホテルの部屋に帰ってきた俺は、パソコンをネットにつなぎ、株の取引を始める。

ここで忘れちゃいけないのがスキルの発動だ。

俺はこの身体になる前は宝くじどころかアイスのあたりも出たことがない。

なので・・・・・・・・

「スキル、黄金率A発動」

このスキルを発動させた。
すると適当に買った株が当たり

今日だけで1億かせげてしまった！

まさかここまでとは・・・

さてとそろそろ寝るか。

俺は、ベットに入り部屋の明かりを消した。

魔法少女リリカルなのは月 2話（後書き）

はい！異世界冒険譚を読んでいたくださありがとうございます！

今回はいわゆる原作前の話です。

皆様から見てもこの作品がどのような評価を受けているかがちょっと怖いですがそうも言ってられません！

これは処女作なのでなにかご指摘があるなら言ってくれとうれしいです。

それではこれからも異世界冒険譚をよろしく願います！

もしも最初に来たのが〇〇の世界だったら。

荒廃した町。空中に1つの魔法陣が現れる。

バサア

その魔法陣から大きな翼ができて何かを包むように閉じる。

バサア

その翼が開くと中には5歳児くらいの長髪の男の子が出てきた。

一見すれば女の子と間違えそうな顔、すこし青い白い髪の毛、そして中国の服を基準とてさらに豪華にしたような白を強調した服、だがそれよりもっと少年にはおかしな特徴があった。

それは背中に翼があることだろう。そんな少女にも見える少年は憂いを帯びた顔をして口を開いた。

「ここは魔法少女リリカルなのはの世界……ってあれ!？」

y u k i t o s i d e

い・・・今起こったことをありのままに話すぜ！

俺は魔法少女リリカルなのはの世界に来たと思ったら、そこは廃墟だった。

何を言ってるのかわからねえと思うが俺も何が起きたのかわからねえ。

催眠術とか超スピードとかそんなチャチなもんじゃ断じてねえ！もつと恐ろしいものの鱗片を味わったぜ・・・

周りを見渡してみたがここは断じて海鳴町じゃない！そして俺は神にリリカルなのはの世界へ飛ばしてくれと頼んだ。

ここから導き出される答えは・・・

「神ー！テメェ間違えやがったな〜！」

ちくしょー。それにしてもここはどこだ？廃墟が在るって考えると、やっぱりマブラヴのアンリミテッドかオルタネイティブの世界かな？俺、終了のお知らせ・・・いきなり難易度高すぎです。・・・○

r z

とりあえずここがマブラヴの世界なら、夕子先生に会いに行かなきゃ。たぶん、この世界で俺の身分を保証してくれるのはあの人だけだと思う。

そんなことを考えながら歩いていると・・・

「ギャウ！」

後ろからそんな声が聞こえてきた！

まずいB E A Tに見つかったか？俺は後ろを振り返る。

するとそこには、白いからだ、大きい口、これまた大きい尻尾、そして屈強な後ろ足、どうやらその生物は2足歩行をするようだ。

その生物の名は・・・

「お・・・お・・・オウガテイルううう！？」

そうゲーム、G O D E A T E Rに出てきたオウガテイルがそこにいた！！

「に・・・逃げろ！」

俺は逃げ出した！・・・・・・・・しかし

「げ！囲まれた！？」

なんとオウガテイルは2体いたようだ。

逃げようにも逃げられない!!

「く!やるしかないのか!」

グギャア!

まず左のオウガテイルが襲ってきた。

「うお!」

俺はそれを回避し距離をとり右手に魔力を左手に気を集める。

「合成!スキル、咸卦法発動!・・・はあっ!」

咸卦の気をまとい襲ってきたオウガテイルに殴りかかる。

ガキィ!

「グルルル・・・ガァァ!」

「なに!?効いてないのか!?」

そんな馬鹿な!?

俺が驚いていても敵は待ってくれない。

すぐさま今度は左のオウガテイルが尻尾のとげを飛ばしてくる。

「うわっ!？」

当たったが、咸卦法のお陰でかすり傷ですんだ。

「くそっ! 食らえ! スキル、錬金術!」

ドドドド!

ハガレンの錬金術で円錐の石柱が地面から飛び出してくる。
手ごたえあり! しかし……

「そんな……これも効かないなんて……」

どうすればいいんだ……

俺はあろうことかその場で立ちすくんでしまった。

その隙を狙って右のオウガテイルが飛び掛ってくる。

「え? うわぁっ!？」

俺はそのまま押し倒され食われそうになった。

「ひっ!？」

何とか腕で防いでいるがこのままでは咸卦法が持たない。

(どうすればいいんだ!？はっ!？)

俺はそのときゲームをやっていたときの博士のセリフを思い出して

いた。

『アラガミのその強固でしなやかな細胞は、同じオラクル細胞を使った神機でなければ切り離せない。』

（そうか！オラクル細胞を使った攻撃だ！！）

そう考え俺はオラクル細胞を手のひらに集め放つ。

「銃撃！カエンラピッド！」

オラクル細胞を使った炎の弾が3発、俺にまたがっているオウガテイルに向かって飛んでいく。

ズガガガ！

「グギヤア！？」

どうやら効いたようだ。オウガテイルが顔から血を出しながら吹っ飛んでいく。

俺はすぐさま立ち上がり体勢を立て直した。至近距離でオウガテイルを撃ったので、顔には血がついている。

（くそっ！血が気持ち悪い！だが弱点わかった。それなら・・・）

「肉体変化！手足アラガミ化！続いてスキル斬撃強化大、破碎強化大、回避速度上昇、近接攻撃速度UP、OP上昇大、発動！」

（これで何とかなるだろう。まずはさっき傷つけたオウガテイル！）

俺はさっき傷つけたオウガテイルに向かって走ってゆく。

オウガテイルはさっきの傷が痛むのか、まだ反応していない。チャンスだ！

「食らえ！正拳突き！手刀！足刀！」

正面からの拳、右からの手刀、左足から出る正面蹴り。破碎、斬撃、破碎、とダメージを受けてオウガテイルは倒れ、そしてコアが露出する。

「そこだ！チツキ（かかと落とし）！」

バキッ！

コアにダメージを受けてオウガテイルは動かなくなる。ようやく死んだようだ。

もう1体のオウガテイルは仲間が死んだのがわかるようでいきなり俺に突進してきた。

「甘い！」

俺はそれを見てバックステップで距離をとる。

「スキル、節約、トリガーハッピー発動！」

俺は、節約で使用するOPを少し減らし、トリガーハッピーでそれをさらに半分にする。

そして今から撃つのは最強の弾丸。

「僕が考えた最強の弾丸、ないぞうはかいだん！！」

まあ俺が考えたわけじゃないんだけど・・・
ないぞうはかいだんは、オウガテイルにくつつきレーザーを連射している。

・・・どうやらコアに当たったようだ。オウガテイルはそれっきり動かなくなる。

「ふゝ助かったゝ。まさかGOD EATERの世界とはねゝ。」

異世界に来ていきなりの戦闘で俺は疲れ、疲労困憊状態だ。しかし・

グルルル・・・

さっきとは違ううなり声が聞こえてくる。俺はさびたブリキ人形のように後ろを見る。

（嘘だろ！？さっきまでが一番最悪だと思ってたのに！）

そこには、

「ヴァ．．．．ヴァジュラ．．．」

ヴァジュラがいた！

「に．．．逃げなきゃ．．．」

（体が動かない．．．）

もうだめだっ！と思ったときだった。

「あ？何でこんなところに子供が？」

という声が後ろから聞こえてきた．．．

「おい。大丈夫か．．．？」

俺はその人物を見た。

青いフードのついた服、白髪、褐色の肌、そしてこれでもかと言うくらい大きな剣。

「ソーマ．．．．さん？」

「あ？何でテメーが俺の名前を？まあいい少し待ってろ．．．」

「は・・・はい！」

そう言ってソーマさんはヴァジュラに向かっていき神機を振りおろす！

「シッ！」

ソーマさんが放った上からの1撃は激しい血しぶきとともにヴァジュラを永久に沈黙させた。

「おい小僧。ここじゃ落ち着いて話ができねえからこっちに来て。帰る途中で何でここにいたか話せ。」

「はい。」

そう言って俺は、ソーマさんについていった。

フェンリル極東支部 通称アナグラ

アナグラに着いた後、ソーマさんに事情を聞かれ、俺は正直に全てを話した。

「つまりお前は、アラガミのいない異世界から来たと？」

「はい。嘘じゃありませんよ！」

「ああ、信じる。」

「嘘じゃないですってば！……って今なんて言いました？」

「信じると言ったんだ。」

「あ……ありがとうございます！」

「確か異世界から来たって言ったな？」

俺は肯定の意味をこめて頷く。

「ようこそ、このクソツタレな世界へ。」

もしも最初に來たのが〇〇の世界だったら。(後書き)

はい！どうでしたでしょうか？主人公の高科雪人君が最初にGOD EATERの世界に来てしまったらという話です。

ソーマさんいいですね？OVAの最後にソーマさんが言った「それでも来るかい？このイカレちまった世界に」というセリフにかなり影響を受けて書いた次第です。

楽しんで頂けたでしょうか？楽しんでいただければ幸いです。

これから異世界冒険譚をよろしく願います！

魔法少女リリカルなのは月 3話（前書き）

警告！今回の話はなのはちゃん視点から書かれる場所があります。

読みにくいです。すごく読みにくいです。（大事なことで2回言いました。）

それにイライラする人は心して読んじやってください。↑結局読ませる。

それでは始まります。

魔法少女リリカルなのは月 3話

俺が後の魔法少女と出会ってから1週間が過ぎ。

なのはちゃんの話だと士郎さんはもう退院して良いそうで・・・俺はなのはちゃんの笑顔を守れただろうか？

魔法少女リリカルなのは月・・・はじまります。

y u k i t o s i d e

「え!?!なのはちゃんのお父さん退院できるの!?!」

「うん!おとうさんもうたいいんできるんだ。おいしゃさんビックリしてたよ。」

「そうなんだ。じゃあなのはちゃんのお陰で良くなったんだよ!きつと」

「うん!ありがとうねユキくん」

あれから1週間、なのはちゃんのお父さんはもう退院できるらしい。俺の魔法が効いたのかな?だったら良いな。

「それでね？あした、『おとうさんたいいんおめでとうパーティー』をやるの！それでおかあさんに『ユキくんもよんでいい？』ってきいたらいいよってしてくれたの！だからユキくん、あしたのパティーにきてなの！」

「いいの？そんな大事なパーティーに僕なんか呼んで。」

「ううん。ユキくんだからきてほしいの！」

「そっか。うん。わかった、行くよ」

「ありがとうなの！」

それから少し暗くなるまでなのはちゃんと遊んだ。少し精神的に疲れたが……

俺は士郎さんへの退院祝いを買って帰った。

s i d e o u t

次の日

nanoha side

きょうはすっごくうれしいひなの。

おとうさんはたいいんしたし、おにいちゃんはこわくなくなってやさしいおにいちゃんにもどってくれた。

なによりユキくんが、おうちにきてくれるのがすごくうれしいの！

「あらあら、なのはったらユキトくんが来てくれるのが待ちきれないみたいね？」

「そ、そんなことないの！」

むーおかあさんはいじわるなの！

「オノレ・・・なのはにワルイ虫が・・・ハイジョシなケレば・・・」

お・・・おにいちゃん？どうしたの？おとうさんがびょういんにいったところよりこわいの・・・

ピンポン

「っ!! わたしでてくるの!」

わたしはげんかんにいってドアをあけたの

「ユキk・・・・・・」

「お邪魔します! 今度この近くに引っ越してきた高科って言います。よろしくお願いします。あ! こんにちはなのはちゃん」

え? え~~~~~!?

side out

yukito side

オッス、おら雪人。いまなのはちゃんの家の前にいんだ! どんないや奴が居んのかオラ、ワクワクすっぞ!

いやもちろん戦わないけどね? 今の俺が高町家の人外さん達と戦ったら瞬殺だよ、瞬殺。

さてとインターホンを押してっと。

ピンポーン

ドタドタ

家の中からすごい足音がする。たぶんなのはちやんだろう。

ドアが開く

「ユキk・・・・・・・・」

「お邪魔します！今度この近くに引っ越してきた高科って言います。よろしくお願いします。あ！こんにちはなのはちゃん」

あ！ビックリしてるビックリしてる。

「え？え〜〜〜〜！？」

うおっ！？声でか！！

とりあえず俺は、色々質問してくるなのはちゃんに、「後で話すから」といって中に入らせてもらった。
するとそこには・・・

ゴゴゴゴゴゴ……

鬼がいた。

くっ……スゲェ殺気だ！……眼球の動きひとつでさえ気取られ殺される……そんな空気だ。小一時間もこんなところに居たら気がどうにかなっちまう！！！！

って！うちはサスケごっこやってる場合じゃないよ！？俺なんかやった！？

は！？まさか……なのはちゃんか！？なのはちゃん、お兄さんに何言ったの！？

「君が雪人君か……噂はなのはから聞いているよ……」

ど……どんな噂なんだろう……

「君に……なのはがお世話になったお礼がしたいんだ……ちょっと道場まで行こうか？」

これは・・・OHANASIですねわかります・・・
天国じゃないけど母さんへ。もう僕は、2回行くことになりそうです。

道場

どうして・・・こんな・・・ことに・・・
俺はKOLな少年の言葉を思い出しながら自問自答する。
互いに武器を恭也さんは、やはり小太刀2本を、俺は普通の竹刀を取った

「てゆくか。止めてくださいよ。士郎さん、桃子さん、美由紀さん」

「まあまあ、危なくなったら止めるから」

「あらあら」

「あはは、ごめんね？こうなったら恭ちゃん私には止められないからさ」

そんな無責任な・・・

「ユキくんがんばって！」

ちょー！？なのはちゃんそんなこと言ったら・・・

ドドドドドド・・・

さらに殺気が濃厚になりました。ありがとうございます。
まずい・・・死ぬかも・・・

くっそー！こうなったら一撃当てて負けてやる！

「では・・・始め！」

士郎さんの合図とともに俺達は動き始めた。

「はあっ！！」

「くっ！」

まず最初に恭也さんが仕掛けてきた！

小手調べなのかそこまで速くない………といっても俺、今身体を気で強化してるから普通の5歳児じゃ防げないけどね？

「ほう……今のを防ぐか……」

「すごいねー恭也ちゃん軽くだけど今、当てる気でやったのに。」

士郎さんたちも見えてないで止めてくださいよ！

今の見たでしょう？当てる気だって美由紀さんも言ってるじゃないですか！

「むーユキくんがんばって！」

ああ！なのはちゃん！君がワザとやってないのはわかってるけど。
今は何も言わないでー

くっ！とりあえず攻撃しないと……

「面っ！」

俺はとりあえず技を発動させて竹刀を振る。

すると竹刀は中学生のときに体育ですこしやっただけとは思えない綺麗な軌道と鋭さをもって恭也さんに向かっていった。

「くっ!？」

俺みたいな子供が今みたいな鋭い面を放ったことに驚いたのか恭也さんは後ろに跳んだ。

今だ攻め続けろ!!

「小手っ!逆胴っ!」

「くおっ!？」

右手を狙った攻撃と左の胴を狙った攻撃を放つが……防がれる!

しかし、最初の攻撃での動揺が残っていたのか、恭也さんは大きく体制を崩す。

今だ!

「メェーンッ」

俺は渾身の一撃を一撃を放った!

が・・・

「なあ!？」

恭也さんの姿がかき消えた!!
こっこれは・・・まさか!？

俺は急いで後ろを振り向く!

「遅い!」

「ガッ!？」

神・・・速?

縦、斜め、横からの攻撃を食らう。

「そっちがはやすぎるんじゃない!」
失った・・・
「という思考とともに俺は意識を

《完》

いやそうはならないけど・・・
おいそこ！「チッ」とか言うな！

「ユ・・・く・・・」

ん？

「ユキ・・・くん」

誰か呼んでる。
誰だろう？

「ユキくん！おきて」

「はっ」

目が覚めるとなのはちゃんの顔が目の前にあった。
はっ！これじゃあ「知らない天井だ・・・」ができないじゃないか！
高町なのは・・・恐ろしい子・・・

side out

nanoha side

ユキくんとおにいちゃんのしあいがおわった

おにいちゃんはいま、「小さい子にやりすぎだ」っておかあさんに
しかられてるの。

ふんだ！おにいちゃんとは1しゅうかんはなにもはなさないなの！

ユキくんはいま、わたしのひぎのうえにいるの。

つまり、ひぎまくらってやつなの。

なんでかおかあさんがゆきくんによってあげなさいっていったの。

おにいちゃんがすつごくはんたいしてたけど、どうしてだろ？

あ！ゆきくんがめをさましそうなの！

「ユキくん」

めがひらきそうなの

「ユキくん」

「ううん」

むゝわたしがこれだけよんでもおきないの。

こんどはおおきなこえでよんでみるの！

「ユキくん！おきて」

「はっ！」

ユキくんがおきたの。

なんかむずかしいかおしてるけどどうしたんだろう？

「ってあれ？」

？ゆきとくんはなにかにきがついたみたいなの

「あの・・・なのはさん？」

「はいなの」

なんでユキくんはわたしをさんずけでよんでるんだろう？

「何で膝枕なんかをされているんでしょう？・・・」

「いや？」

「イエッ！全然いやじゃないですよ！？」

おかあさんがユキくんが「なんでこんなことになってるの？」って、
きいてきたらこうこたえなさいっていったんだけど、ユキくん、
スツゴクあせてるの

「あっそうだ！？なのはちゃん今何時？」

「今は・・・6時だよ？」

「そっか・・・ありがとう今日はもう帰るね？」

そうって、ユキくんはたちあがって、おとうさんにたいいんいわ
いと、ひっこしいわいをわたしにいったの。

よくわからないけどすこしざんねんなの

side out

y u k i t o s i d e

ふう〜びっくりした起きたらなのはちゃんが膝枕してくれてたんだもん。

とりあえず、士郎さんに退院祝いと、引っ越し祝いを渡した。

桃子さんが「なのはの膝枕どうだった？」と聞いてきた。

・・・あんたが犯人か・・・グッジョブ！

とりあえずその質問はスルーして俺は家に帰った。

そういえば俺の家の紹介をしていなかったな。

なのはちゃん家に近い場所にある家で60坪くらいの大きさちよつと一人で住むには大きいよね？

で、3階建てというより地下室があります。

防音用と認識阻害の陰陽術もかけてあるので魔導師にばれることはありません。やったね！

俺は地下室にいった。

地下室はトレーニングルームです。

かなり広くて、6人くらいで組み手やっても大丈夫なくらいの

やっぱり力をあまり使わないって縛りをつけていても悔しいものは悔しい。なので今日はここで修行します。

「影分身の術！」

ボン

という音とともに現れる剣を持った俺、人数は2人。

「トレース・オン」

俺も投影して剣を作り出します。

「とりあえず素振り一人100回な」

「「おう！」」

side out

sirou side

雪人君が帰っていくやれやれ、あの歳であの腕とはすごい才能の持ち主かもしれない。

「ねえ、お父さん」

考えていると美由紀が話しかけてきた。

「なんかあの子変じゃなかった？ あんな鋭い技が使えるのに身体ができてないし、剣だこもなかったよ？」

たしかに・・・雪人くんは変なのだ。それに恭也のばればれの誘いに簡単に乗ってきたから戦い慣れてもいないようだね。

「なんなんだろうね、あの子」

「さあな？」

魔法少女リリカルなのは月 3話（後書き）

今回のお話は主人公がなのはちゃんの家に行くところですね。

え！？なのはちゃんのセリフが読みにくい！？すみませんががんばって読みやすくはしているんですけれど。

でも5歳児ってこんなもんだと思うので変えません。

これからも頑張りますので異世界冒険譚をよろしくお願いします。

魔法少女リリカルなのは月 4話 上

この広い空の下には幾千、幾万の人たちがいて。

いろんな人が、願いや思いを抱いて暮らしていて。

その思いは・・・時に触れ合って、ぶつかり合って。

だけど、その中のいくつかはきっと繋がっていきける、伝え合っていける。私と雪人君がそうだったように・・・

これから始まるのは、そんな・・・出会いとふれあいのお話・・・

魔法少女リリカルなのは月・・・はじまります。

n a n o h a s i d e

暗い暗い森の中何で・・・私はこんな所にいるの？

「ハア・・・ハア・・・」

誰かの苦しそうな息づかいが聞こえる。あれは・・・男・・・の子？

私と同じくらいの男の子が腕から赤い血を流しながら苦しそうにしているの・・・

男の子は辺りを注意深く見ているの・・・

ガサツ！

『何か』が来た・・・と思ったら男の子が赤いビー玉みたいなのを取り出したの・・・

パーーーーー！

そのビー玉みたいのから、丸い・・・うん・・・魔方阵みたいなのが出てきたの・・・

『何か』はそれでも男の子に向かって行った・・・

そしたらその男の子は、何かを唱えだしたの・・・まるで魔法の呪文みたい・・・

「妙^{たえ}なるくびき光となれ！許されざる者を封印の輪に！」

『何か』は跳んで男の子に激突しようとしている・・・危ないよ・・・

「ジュエルシード！封印！」

『何か』と魔方阵がぶつかりあう・・・

勝者は男の子だった・・・

魔方阵は『何か』を弾き飛ばし男の子は傷1つついていない・・・

『何か』は逃げ出した・・・男の子は追おうとしたみたいだけど疲れているのか今にも倒れそうなの・・・

「逃がし・・・ちゃった・・・追いかけて・・・なく・・・ちゃ・・・」

ドサッ

男の子は倒れちゃった・・・

（誰か僕の声聞いて、力を貸して・・・魔法の・・・力を・・・）

喋っていないはずの男の子の声が・・・頭に響く・・・
そして・・・男の子は光を放ったと思ったらそこに男の子はいなくて・・・代わりにフレットがいた・・・

♪~~~~

ううんうるさいの・・・
うるさい携帯は黙るの・・・

カタッ

あ・・・落ちちゃった・・・

拾い上げてアラームをきる。

「ふぁゝぁ・・・何か変な夢見ちゃった・・・ううん」

身体を伸ばして私の1日は始まった。

side out

yukito side

「ん?・・・来たか。ユーノ・スクライア」

みんなおはよう。高科雪人です。

みんな聞いてくれ。どうやら原作の開始のようなんだ。
え?なんで4年も空くかだって?それは、修行風景なんて見ても面白くないだろ?

知りたいの?じゃあ箇条書きだけどカンベンな。

まず、俺が最初にしたことは肉体変化だ。
ある柔術家の人が言ってたろ?人間の身体は、持久力に優れた赤い筋肉と、瞬発力に優れた白い筋肉と、ほんの少ししかない両方の性質を兼ね備えたピンクの筋肉でできているって。

そう！俺は全身の筋肉をまずピンクの筋肉にしたんだ！

次にとりあえず持久力を上げようと思って朝と夕方にランニングを始めたんだ。

そして、たくさんの技を影分身たちと練習しまくった。

なぜかというピンチのときに身体に覚えこませた技で助かったところがあるだろう？

影分身はNARUTOの影分身だから、経験がどんどん俺に蓄積されていく。

それに能力ばかりに頼るとつまらないからな。

最後に魔力を伸ばす鍛錬だ。

やってることはただの模擬戦なんだけだな。

影分身たちとガチンコバトルをやって魔力をたくさん使ってレベルアップを図ったんだ。

そんなこんなで今の俺の魔力は無限の剣製3分維持、あとネギまの雷の暴風を4発撃てるレベルになったんだ。

撃ってないんだけど感覚でわかるっつーか。まあそんな感じ

あと一応ふつうの勉強にも力を入れている。

前世ではあまり勉強もしてなかったので成績は悪かったし・・・2
度目の人生だから勉強してみるのも良いかな？つかおもったのだ。

さてとそろそろ時間だしなのはちゃんの家に行くか。

side out

nanoha side

わたし、高町なのは。

私立聖祥大附属小学校に通う小学3年生。

高町家においては、3人兄弟の末っ子さんです。

「おはよ〜」

「あっ！なのは、おはよう」

わたしがあいさつしたらお母さんも返してくれる。

「おはよう、なのは」

お父さんもあいさつしてくれた。

「はい。これお願いね。」

「は〜い」

飲み物を台所からリビングに持っていく。

「ちゃ〜んと1人で起きられたな〜、えらいぞ〜」

こちら高町士郎さん。

駅前の喫茶店、翠屋のマスターさんで、一家の大黒柱さん。

「朝ごはん、もうすぐできるからね〜」

そして、お母さんの高町桃子さん。

喫茶翠屋のお菓子職人さん。綺麗で優しいのはの大好きなお母さん！

ちなみに、翠屋は駅前商店街の真ん中にある、ケーキとシュークリーム、自家焙煎コーヒーが自慢の喫茶店。

学校帰りの女の子や、近所の奥様達にも人気のお店なの！

あれ？お兄ちゃんとお姉ちゃんがないの。

「ねえ、お兄ちゃんとお姉ちゃんは何？？」

「ああ、道場に居るんじゃないか？」

道場

お兄ちゃんとお姉ちゃんを呼びに、わたしは道場に來たの。

ガラッ

「お兄ちゃんお姉ちゃんおはよう。朝ごはんだよ！」

中を見てみるとお姉ちゃんは素振りをしていてお兄ちゃんはそれを指導してるみたい。

「おはよう」

「ああ。なのは、おはよう」

汗をかいていると思ったからタオルを持ってきていたのでお姉ちゃんに投げ渡した。

「はいっ！」

「ありがとう」

この二人がわたしのお兄ちゃんとお姉ちゃん。

「じゃあ美由紀今朝はここまで。」

お兄ちゃんの高町恭也さんは大学1年生。

お父さん直伝の剣術家でお姉ちゃんのお師匠さん。

なぜかわたしが、ユキくんの話をするに怒っちゃったさん。

「はい。続きは学校から帰ってからね？」

で、お姉ちゃん。

高町美由紀さんは高校2年生

この人たちがわたしの家族です。

ピンポン

「あ！はい」

でももう1人、わたし達の家族みたいな人がいるんです。

「おはよ、なのはちゃん」

「おはようユキくん！」

ご近所さんでわたしの友達の、高科雪人くん。

わたしはユキくんって呼んでるの。

わたしが5歳のときに引っ越してきて、一緒に遊んだり、勉強を教えてもらったりしてるの。

「おはようございます。恭也さん、美由紀さん。」

「おはよう」

「おはよう雪人君」

「じゃあご飯食べにいこっ！ユキくん」

「うん。俺、もうおなか減ったよ」

ユキくんはそう言いながらわたしの家に入っていた。

ユキくんは小学校に入ってから朝ごはんは家でたべていくの。

「みんなあれだぞ？こんな料理上手なお母さんをもって幸せなんだから、わかってんのか？」

「わかってるよ、ね？なのは。」

「うん！ユキくんもそう思うよね？」

「ああ。俺もこんなおいしい朝ごはん食べられるなんて、幸せすぎて怖いくらいだよ」

「もうやだあなたったら♪」

高町家の両親は今だ、新婚気分バリバリです♪

で、お兄ちゃんとお姉ちゃんもとっても仲良しで、

それでわたしはユキくんと仲が良くと、家族関係も良好です。こんなときがずっと続けば良いな。

魔法少女リリカルなのは月 4話 下

y u k i t o s i d e

ふう〜やっぱり桃子さんのご飯は最高だな。

俺が桃子さんの料理を食べられたという幸福に浸っていると

「ユキく〜ん。もうすぐバス来るよ〜」

もうすぐバスが来る時間だ。歯を磨いて制服を整えてつと。
おっ！ちょうどバスが来たようだ。

「なのはちゃん行こうか？」

「うん！」

バスの中

「なのはちゃん、雪人君」

「なのは！ユキト！こっちこっち！」

出ました。バーニング・アリサ！ではなくアリサ・バニングス、そして月村すずか。

「おはよう。すずか、アリサ」

「おはよう。アリサちゃん、すずかちゃん」

「「おはよう」」

アリサ、すずか、そしてなのはちゃんは1年のときから同じクラスなんだ。

1年のときのアリサとなのはのケンカは俺はその場にいなかった。俺が居ること逆になのはとアリサ、そしてすずかが友達になれないことは避けたかったし。

なのはにケンカのあとで友達として紹介されて、今では家に呼ばれたり、一緒に弁当を食べる仲だ。

4時間目の授業が終わって屋上でお弁当を食べていたらなのはちゃんか。

「将来か・・・あむっ・・・アリサちゃんとすずかちゃんはどうきまつてるんだよね？」

「うちはお父さんもお母さんも会社経営だし、いっぱい勉強して、ちゃんとあとを継がなきゃ・・・ぐらいだけど？」

とアリサはすずかを見ながら言った。

「私は、機械系が好きだから工学系で専門職が良いなと思ってるけど」

「そっか・・・」

どうでも良いがこいつらマジですごいな。

・
小学校3年といったら俺なんか、遊ぶことばかり考えてたのに・

「ユキくんは？」

「俺か？俺は決まってるな」

「えっ！？そうなの？」

「当たり前じゃん、家がでかい会社とか、自分が好きなものはこれだって思ってるやつ以外は、みんなそんなもんだよ。」

「そうなのかな。」

「まあ、俺の場合はなりたい職業じゃなくてやりたいことはあるけどな。」

「え？」

「それってなんなの？」

「教えなさいよ」

「俺がやりたいことそれは……」

「「それは？」」

「宇宙人や未来人や幽霊や妖怪や超能力者や、悪の組織やはたまたそれと戦うアニメ的漫画的特撮的ヒーロー達と遊んだり勝負したり一緒に戦うことだ！！」

これが俺の夢、まあもう叶ってるんだけどね？

「あんたねーもっと現実を見なさいよ」

「なんて言われようとこれが俺の夢だ。それに言っただろう？なりたいたい職業じゃなくてやりたいことだって。」

「クスクス……でもいい夢だよ？」

「あ！そうだすずかそういう機械作ってくれよ名〇偵コナ〇のやつみたいなの！」

「ノアもセットであげるよ」

「それはいらん」

俺達がバカみたいな話をしていとなのはが

「みんなすごいよね、将来のやりたいこととか夢があって」

「なのは、「二人は」にしろ。こいつのは夢じゃなくて妄想よ」

「ひでえ」

そんな話をしていると休み時間が終わったようだ。

学校の帰り。

なのは達は同じ塾に行っているので塾に行っていない俺は、途中で別れます。

途中まで一緒に帰っていると塾の話になった。

「3人とも塾楽しそうだね？」

「楽しいわよ？・・・あんたもわたしたちと同じ塾にすればいいのに」

「ごめんねアリサ。でもウチそんなに余裕無いから・・・」

「あ・・・ご、ごめん」

なのはちゃん達には両親がいなくて1人で生活しているといっているの、アリサは今の発言は失言だということに気がついたようだ。この設定のお陰で何度士郎さんや桃子さんに、一緒に住まないかと聞かれたことやら・・・

ちなみに俺が塾に通ってない理由は、あんまり塾が好きじゃないからだ。

アリサたちには、ウチは両親が残したお金で生活していると言っている。

そんなことを話しているうちに、どうやらいつものなのは達と別れている道に来たようだ。

「じゃあね。アリサ、すずか、なのはちゃんまた明日。」

「うん！ユキくんまた明日！」

「またね。雪人君」

「じゃあね！ユキト。」

俺はなのはちゃん達と別れて家に帰った。

さて、そろそろなのはちゃん達がユーノを、見つけているはずだ・・
・とりあえず夜になるまで何もなければ、ランニング行ってこよう。

♪

「ん？なのはちゃんからメール？」

『ユキくん。今日、塾に行くときにフェレットを拾ったんだけど、ユキくん家で預かれない？』

いやいや！ユーノは君の家で預からないと物語がはじまりませんよ
！？

とりあえず、物語を始めてもらうために、家では預かれないと返事
をしておいた。

『わかったの。わたしもみんなに相談してみるの。』

ふう。何とかなったようだ。

今日の予定は後、なのはちゃんが魔法少女になるのを見守らないと。
原作との違いでなのはちゃんは死んじゃうかもしれないし。

俺は夕飯を食べ少し厚着をして動物病院へ向かった。

待つこと1時間ぐらい？なのはちゃんが、動物病院の前に来た・・・
・よし。ユーノと一緒に逃げられたみたいだ。なのはちゃんは今、
走ってジュエルシードの暴走体？から逃げている。

ここからじゃ聞こえないがユーノが何かを話している。
そんなことをしている間に暴走体なのはちゃんにジャンプして押
しつぶそうとしてくる。

まずい！原作と違う！あれは直撃コースだ！

仕方なく俺はなのはちゃんを助けるためにある魔術を発動させる。

「トレース・オン」

side out

nanoha side

なにになになんなのー！？
わたしはアリサちゃんに、フェレットさんはウチで預かれますって
メールをしたらいきなり頭の中に昨日の夢と、今日の夕方に聞こえ

てきた声が、また聞こえてきて。

わたしはこの声はフレットさんがやってるんだと思って、動物病院に走っていったの。

動物病院に着いたらフレットさんが、黒くて大きくてまん丸の『何か』に襲われてて、いきなりしゃべりだしたフレットさんと一緒に『何か』から逃げ出したの。

「その、何がなんだがよくわからないけどいったい何なの！？何が起きてるの！？」

わたしがそう言うのとフレットさんは、資質とか、こことは違う世界とか力を貸して、とか色々言ってきたの。
資質！？違う世界！？なんなの！？

わたしがそう思っているとフレットさんが飛び降りてこっちを向いて話しかけてきたの。

「お礼はします！必ずします！僕が持つてる力をあなたに使ってほしいんです！僕の力を・・・魔法の力を！」

「まほー？」

そんなこと言っていると『何か』がわたしを踏み潰そうとしてきた。

（当たっちゃう・・・わたし死んじゃうの？ユキくん・・・助けて！）

わたしはそんなことを考えた。
でも次の瞬間！

ヒュッ！ズガアアアン

風切り音とともになにかが『何か』に中った。

「きゃあ！」

すごい風が起き、わたしは電柱の影に隠れてやり過ごした。

わたしが見たときは『何か』はバラバラになっていた。

「すごい・・・でもどこから？」

「し、死んじゃったの？」

「いいえ、このままだと、すぐに復活してしまいます！」

「そんな・・・どうすればいいの？」

そう言ってフェレットさんは、わたしに赤いビー玉みたいなものを渡してきた。・・・あったかい

「それを手に目を閉じて、心を澄ませて。僕の言うとおりに繰り返して・・・いい？いくよ！」

「うん・・・」

「我、使命を受けし者なり」

「・・・我、使命を受けし者なり」

「契約のもとその力を解き放て」

「えと・・・契約のもとその力を解き放て」

「風は空に星は天に」

「風は空に星は天に」

「そして不屈の心は」

「そして不屈の心は」

「「この胸に！」」

「「この手に魔法を！レイジングハート、セットアップ！」」

「スタンバイレディ、セットアップ」

side out

yukito side

「ふう〜。何とかなったか」

なのはちゃんは原作どおりにレイジングハートをセットアップした

遠くからでもなのはちゃんの魔力光が見える。

ん？どのくらい遠くにいたかって？

なのはちゃんから2キロ先の屋根の上にいます。さっきの攻撃もカラドボルグを暴走体に当てたんです。ミスったりしてなのはちゃんに中ったら困るのでチャクラで操作できるようにしてたんだけど大丈夫だったみたいだ。

つかすげーなジュエルシードあれくらってまだ大丈夫って・・・

お！なのはちゃんが暴走体にとどめもとい封印しようとしてるぞ！

もう大丈夫そうだな。今日は帰って寝るか。

魔法少女リリカルなのは月 4話 下（後書き）

この度は異世界冒険譚を読んただきまことにありがとうございます。
ます。

今回は少し長かったので、上下2話に分けての投稿でした。

いかがでしたか？これからも異世界冒険譚をよろしくお願いします。
感想待ってます！

10000ヒット記念雑談

作者「イエーイ！祝！10000ヒットー！」

雪人「いやにテンション高くなってるな。お前。」

作者「まあねー。まさかこんなに読んでもらえるとは思ってなかったもんで。」

雪人「まあ、解らなくは無いけど。」

作者「さてさてこのコーナーでは……何をしましょうか？」

雪人「考えてなかったのかよ！」

作者「何にもね！」

雪人「えばるな！ったく。じゃあ仕方ないからお前より年上であるこの俺がなんとかしてやろう。」

作者「ぷっ！その背丈で年上と言われても、子供が背伸びしているようにしか見えませんかゼダンナ。」

雪人「……」

作者「……あれ？おい。雪人さーん。」

——ぶちっ！

作者「ん？なんだ？今の音は。」

雪人「・・・今死ね！すぐ死ね！骨まで碎けろ！」

作者「ひでぶ！あべし！ちょ！バルバトスの技は・・・」

雪人「ジェノサイド・ブレイバー！」

作者「うぼあああああ！」

雪人「ふっ。悪は滅んだ。」

技が通り過ぎるとそこには作者（笑）が・・・

雪人「おーい。大丈夫か？作者。」

作者「・・・・・・・・。」

雪人「返事が無い。ただの仕方のないバカのようなだ。」

作者「誰がバカだー！」

雪人「おお！生き返った。」

作者「酷いじゃないか！危うく死に掛けたよ！？」

雪人「まあまあ。良いじゃないか、生きてたんだから。」

作者「つか。こんなことしてたら何かする時間が・・・」

雪人「10・・・9・・・8・・・」

作者「え!?!?うそ!?!?ちよつまっ!」

雪人「2・・・1・・・」

作者「これからも異世界冒険譚をよろしくお願いしまー・・・」

ブツッ

10000ヒット記念雑談（後書き）

予告のよの字も無い雑談でしたね。

まあ雑談なんでこのくらいで許してやってください。

魔法少女リリカルなのは月 5話

ようやく始まったこの世界の物語・・・

色々危ないこともあるけどなのはちゃんは魔法少女になるようです。
俺はなのはちゃんを今回も見守ろうと思いました・・・

魔法少女リリカルなのは月・・・・・・はじまります。

y u k i t o s i d e

「ううゝん」

朝、起きた俺はランニングを2時間ほどした後、制服に着替えなのはちゃんの家に行く。

なのはちゃんの家で朝ごはんを食べてから、歯を磨きなのはちゃんと一緒に学校に行く。

「おはよゝ」

「おはよう」

学校に着た俺達は、自分の席に・・・俺はなのはちゃんの前の席にかばんを置きながらアリサとすずかに挨拶をする。

「なのはゆうべの話聞いた？」

「ふえ？ゆうべって？」

「どうかいたのか？」

俺にはわからないことのはずなので、俺は疑問を口にした。

「昨日私達がフェレットを預けた病院で自動車の事故とか、何かよくわからない穴とかが空いてたらしくて・・・」

「あのフェレットが無事かどうか心配で・・・まったく！どこのどいつよ！自動車壁にぶつけたうえに地面に穴まで掘って行って！バツカみたい！」

かなりユーノのことが心配だったんだろう。俺が使ったカラドボルグも相当な被害を出しているようだ。・・・少し自重しよう。

「あ・・・えーつとねその件はその～」

なのはちゃんは原作と同じように、アリサや、すずかに逃げてきた

ユーノとぼったり出会って家で預かっている。ということ伝えた。

学校が終わって今日はみんなと一緒に帰った。

学校にはすずかの家が一番近く、1番はじめにすずかと別れる。

つーかいつ見てもでかい家だな。何坪くらいあるんだろ？

次に別れたのはアリサだ。

黒い車がアリサを迎えに来ている。車種はわからないが、やっぱ高いんだろうな。

アリサは乗っていくか聞いてきたが、なのはちゃんが断ったため、俺も断った。

なのはちゃんと家に帰っていると、俺は何か違和感を感じた。なのはちゃんも何か感じたらしい驚いた顔でとまっている。

するとなのはちゃんは、いきなり走り出した！

「なのはちゃん！？どうしたの！？」

「ごめんユキくん、先に帰ってて！」

なのはちゃんは、走りながらそう言ってもう行ってしまった。

2個目のジュエルシードか・・・確か2個目もそこそこ危なかったよな？

そういうわけで、俺は裏路地に入り魔力を解放して、屋根の上に跳んだ。

目に魔力を流して神社のほうを見る。弓と矢を投影することも忘れない。

数分後なのはちゃんとユーノがきた。

・・・よし！何とか倒したようだな。何回かヒヤツとする場面があったけど。

次からは見守らなくて大丈夫だろう。

もうセットアップって言えばバリアジャケット使えるし。

そんなことを考えながら、俺は家に帰っていった。

魔法少女リリカルなのは月 5話（後書き）

次はサッカーチームを応援した後ジュエルシードが発動するやつです
ね。

誰か・・・文才をください。

魔法少女リリカルなのは月 6話

なのはちゃんが、魔法を手に入れてから早1週間……連日の戦闘でなのはちゃんも疲れているみたいで……まだ手助けしたほうがいいんだろうか？

魔法少女リリカルなのは月……はじまります。

y u k i t o s i d e

今日は、士郎さんに呼ばれてなのはちゃん達と一緒に士郎さんが監督を兼オーナーをやっている翠屋JFCの試合のを見にきた。

なのはちゃんからアリサとすずかと一緒に応援しに行こうって約束していたんだ。

「さて。応援席もうまってきたようですし、そろそろ試合をはじめますか。」

「ですな。」

お！試合が始まるようだ。

なのはちゃんたちも応援しているし俺も応援するか。

「がんばれ！がんばれ！できる！できる！ぜっ」

・・・うん！試合は2対0で翠屋JFCが勝ったよ？
時間が飛んだような気がするけどそんなことなかったぜ！

どうやらこの後翠屋で、みんなで昼食を食べるようだ。

俺も呼ばれてみんなで翠屋に行ってケーキをご馳走になった。

「ごちそうさまでしたー」

「ありがとうございましたー」

「みんな、今日はすっげえ良い出来だったぞ。」

どうやらサッカーチームの子達はみんな食べ終わって、もう解散の

ようだ。

なのはちゃんはジュエルシードにきずいたのかチームの1人の男の子を見ている。……。あれがジュエルシードを持っている男の子か……

あ！なんかマネージャーやってた女の子が、その男の子と一緒に帰るようだ。付き合っているのか？リア充は死ね！！……。おっと俺としたことが取り乱してしまったようだ。

なのはちゃんは気のせいだと思ったことと、ユーノがアリサ達にもみくちゃんにされていることに気をとられて、ジュエルシードに気がつかなかったようだ。

「じゃあ私達もそろそろ解散？」

「うん！そうだね。」

「そうだな、じゃあ今日は解散ってことで」

「そっか。今日はみんな午後から予定があるんだよね……」

「お姉ちゃんとお出かけするんだ。」

「パパとお買い物！」

「俺は適当に町をまわりながら買い物してくる。」

俺達は予定を話し合った後、解散した。

さて、まずは本屋にでも行くか・・・

本を買って次はどこに行こうか考えているとジュエルシードの魔力を感じた。

どうやらあのカップルのが発動してしまったらしい。

そんなことを考えていると、目の前の地面から木の根っこが！！

「くっ！？ATフィールド発動！！・・・ぐあっ！！」

とっさにATフィールドを張ったが、あまりの衝撃に体が跳ね飛ばされ壁に叩きつけられる！

「ガハッ！・・・ぜえ・・・ぜえ・・・危なかった。」

こりゃ・・・なのはちゃんだけに任せておくのは危険だな・・・
そう判断した俺は呪文を唱える。

「我、天命を受けし者なり。真の姿を我の前に示せ。光は天に、暗黒は闇に。そして獅子の心はこの腕に！契約のもと、雪人が命じるライオンハート！セットアップ！……トレース・オン（ぼそっ）」

ええ……デバイスなんてもってませんよ！なに！？紛らわしい！？良いじゃないですか、やってみたかったんだもん！

とにかく俺は、髪のを長さを腰までにして、ユエの服を構築する。

この服はユエの姿になった特典みたいなもので、サーヴァントと同じように魔力を通せば着れて、なのはちゃんのバリアジャケットと同じくらいの強度があるらしい。

その手の中にはライオンハートが収まっている。かっこいいよね、ガンブレード。

さらにセイバーオルタの仮面を投影し、強化の魔術をかける。隠匿に強化をかけたことにより、これをつけていると俺の正体がわからなくなる。という優れもの。

じゃあ行くか。

side out

nanoha side

わたしはユーノくんと話し合って、今日はジュエルシードの探索はお休みすることにしたの。

パジャマに着替えて夕飯までお休みしようと思ったら、ジュエルシードの発動を感じたの。

わたしは、すぐに普段着に着替えて急いで階段を降りていく。

「なんだ？なのは、一緒に入るか？」

ってお父さんが、言ってきたけどそんな場合じゃないの！

「ゴメーン。お父さんまた今度ー！ちょっとお出かけしてきまーす！」

わたしはジュエルシードの魔力が町中に広がっていたからまず、町を見渡せそうなビルにのぼってレイジングハートをきどうしたの。

「レイジングハート！お願い！」

「スタンバイ・レディ。セットアップ。」

レイジングハートを起動したわたしは、町を見てびっくりしたの。
わたしの生まれ育ってきた町が、大きな木がいっぱい生えてきて、
町がところどころ壊されていたの。

「ひどい……」

「たぶん、人間が発動させたんだ。強い思いをもったものが願いを
こめて発動させたとき、ジュエルシードは一番強い力を発揮するか
ら。」

「……やっぱりあのときの子が持ってたんだ。わたしきずいてい
たはずなのに……。こんな事になる前に止められたかもしれない
のに……」

「ユーノくんこうゆう時どうしたらいいの？」

「え？」

「ユーノくん！」

「あっうん。封印するには接近しないとだめだ。まずはもととなる
部分を見つけないと。でもこれだけ広い範囲に広がっているとどう
やって探したらいいか……」

「もとを見つければいいんだね。」

「え？」

わたしはレイジングハートにお願いした。

「エリアサーチ。」

「リリカル・マジカル。探して災厄の根源を！」

わたしがそう言うと、ビルの上屋に魔方陣が描かれる。そこに杖を振り下ろすと、わたしの魔法が町中に広がって頭の中に町の様子が見えてくるの。

っ！！いたジュエルシードのものの部分。

「見つけた！」

「本当！？」

「すぐに封印するね！！」

「ここからじゃ無理だよ！近くに行かなきゃ！」

「できるよ！大丈夫！……そうだね？レイジングハート。」

「シューリングモード。セットアップ。」

その声とともにレイジングハートの形が変わって光の翼が出てくる。

わたしがそのまま第1射を放とうとしたとき。

ヒュッス パパ パパ！

そんな音とともに枝が落ちて、わたしとジュエルシードの間に何もなくなった。

「え？・・・でもっこれなら！」

「スタンバイ・レディ。」

「リリカル・マジカル。ジュエルシード、シリアル？・・・封印！」

レイジングハートと一緒に封印の魔法を発射したの。
魔法はまっすぐ飛んでいってジュエルシードに当たった。

「シーリング」

レイジングハートの声とともにジュエルシードの魔力でできた、木がなくなったの。

わたしはジュエルシードを封印したらビルの端に行って今、枝を取り除いてくれた人を探したの。

！！いた・・・ここからじゃよく見えないけど白くて長い髪の毛、

そして豪華な白を強調した服。

その人はわたしと目が合うと、ゆっくり路地裏に行っちゃったの。
でも今の人どこかで見たことがあるような？

side out

yukito side

「ちっ！邪魔だ！」

——ヒュッガウン！

俺はライオンハートのトリガーを引き、邪魔な木の根を切り飛ばしながら進む。

大通りに出た俺は視覚を強化しながら、なのはちゃんを探す。

いた。ビルの屋上にいる。枝の位置などを見てみるとなのはちゃんは1射目で枝を全て落とし、2射目で封印しようとしているようだ。

あまり手伝うのものはちゃんの今後を考えるとどうなんだろう？
と思っているのだが、今回は町に被害が大きいため早く終わらせる
ためになのはちゃんに協力する！

俺は剣を構え技を発動させる！

「真空ぶった切り+！」

シャーマンキングの真空ぶった切りに氣を使った斬撃を併せる複合技。

何発か斬撃を放ち、なのはちゃんの邪魔になる枝を取り払う！

その後、ピンク色の魔力光が放たれジュエルシールドが封印された。

なのはちゃんのほうを見ていたら、なのはちゃんもこっちを見た！！

まずい！バレないと思うけど万が一ってことがある。

俺はその場から路地裏に逃げた。

side out

nanoha side

「いろんな人に迷惑かけちゃったね。」

「な・・・なに行ってたんだ！なのはちゃんとやってくれてるよ！」

そうユーノくんは言ってくれた。でもね？

「わたし、きずいてたんだ。あの子がジュエルシールドを持っていたこと。でも氣のせいだって思っちゃった。」

「なのは！もともとは僕が原因で・・・なのははそれを手伝ってくれているだけなんだから。・・・なのは！なのははちゃんとやってくれる！」

魔法使いになって初めての失敗。自分のせいでみんなに迷惑がかかったかと思うととてもつらいです。

「あれ？なのはちゃんまたあったね。ん？どうしたのなのはちゃん
元気ないみたいだけど・・・」

「あつ。ユキくん・・・なんでもないの。」

「嘘、何か大きな失敗しちゃって人に迷惑かけて後悔してるって顔してる。」

「っ！どうしてわかったの！？」

「勘で言ってみただけどやっぱりそうだったみたいだね。何があったの？」

わたし、そんなにわかりやすい顔してたかな？

「・・・・・・・・・・」

「・・・言いたくない？それとも言えない？」

「ごめんなさい」

「良いんだよ。言いたくないならそれでも。」

そう言ってユキくんはわたしの頭をなでてくれた。・・・暖かい・

「じゃあ。何か後悔しているのはちゃんに一言授けよう。・・・ゴホン・・・お母さんが言っていた『反省はして良いけど、後悔はするな』って。」

「え？」

「反省は次につながっていくけど、後悔は後ろばかり見ていつまでたっても前に進めないんだって。・・・ためになった？」

ユキくん・・・ユキくん、お母さんのこと思い出すの辛いはずなのにわたしのために・・・

「・・・うん。ありがとうユキくん！」

「やっと笑ってくれたね。やっぱりなのはちゃんは、笑顔が一番似合ってるよ。」

「ふえ！？あ・・・ありがとうなの／＼／」

「・・・じゃあ帰ろうか。今日はなのはちゃんの家でご飯食べていこうかな。今から行っても平気かな？」

「うーん・・・今ならまだ大丈夫だと思うの。」

「そっか。じゃあ、なのはちゃんの家でご飯食べるために・・・駆け足！」

「あ！待ってよユキくん！」

ユキくん。本当に・・・ありがとうなの。

わたし、ユキくんやアリサちゃん、すずかちゃんに迷惑がかからないように全力でジュエルシード集めるから！

魔法少女リリカルなのは月 6話（後書き）

6話あげました。

今回は木が町を覆ってしまう話です。

雪人君はデバイス欲しかったんでしょうか？ごめんね。

雪人君が最後のほうに言った反省はして良いけど、後悔はするなつて言葉はTOD2のカイル君が言った言葉です。あの時ちよつと感動しちゃいましたよ。

それではまた次回。

魔法少女リリカルなのは月 7話

人がジュエルシードを暴走させてから1週間・・・

今日はすすかの家にお茶会に誘われている。

そこでなのはちゃんは、運命の名を持つ少女と出会う・・・

魔法少女リリカルなのは月・・・はじまります。

どこかのビルの屋上、そこには一人の少女と1匹の犬がいた。

少女の姿は、黒いマントに金髪のツインテール、そして斧のような武器を持っていた。

「ロストロギアはこの付近にあるんだね？・・・形態は青い宝石、一般呼称はジュエルシード。」

少女は誰かに話しかけるように、しゃべり続ける。

「そうだねすぐに手に入れるよ。」

y u k i t o s i d e

今日はすすかの家にお茶会の誘いがあったてすすかの家に来ている。

俺やなのはちゃんは、アリサ、すずかとお茶会を。なのはちゃんのお兄さんの恭也さんはすずかのお姉さんの忍さんに会いに行くらしい。

——ピンポーン

インターホンを鳴らすと中からメイドさんが出てくる。この光景にもようやく慣れた。最初の頃はわかっていても少しびっくりしていたからな。

「恭也さま、雪人さま、なのはお嬢様、いらっしやいませ。」

「ああ。お招きに預かったよ。」

「こんにちは。」

「こんにちは。」

俺たちがそう言うと、メイドさんにはっこりと微笑みながらすずかたちのいる部屋まで案内してくれた。

このメイドさんは、月村家メイド長のノエルさん。とらは3だと自動人形だけどこの人はどうなんだろう？

部屋に着くとアリサとすずかと女性が二人いた。

「なのはちゃん！ユキトくん！いらっしやい！」

このメイドさんはノエルさんの妹のファリンさん。すずかの専属メイドでおっちょこちょいだけど、明るくて元気な人だ。

「恭也、いらっしやい。」

「・・・ああ。」

恭也さんと忍さんは高校のときからのクラスメイトで、今は付き合っているらしい。ちくしょう。俺だってやろうと思えばな〜

「お茶をお持ちします。何がよろしいですか？」

「任せるよ。」

「なのはお嬢様は？」

「わたしも、お任せします。」

「俺も、お任せで。」

お茶の種類なんぞわからないからな。

「かしこまりました。・・・ファリン。」

「はい。了解です。お姉さま♪」

ファリンさん達がお茶を用意しにいったそれに続いて恭也さんと忍さんも、部屋に行くようだ。

ファリンさんを待って、俺たちが話をしていると。

「キュー!!」

・・・ユーノがニャンコに追いかけていた。・・・ん? このあとになんかあったような?

「おまたせしましたーイチゴミルクティーとピーチティー、チーズクリームクッキーです!」

どうやらファリンさんがお茶を持ってきたようだ。そこにユーノとニャンコが足元で追いかっこをする。ファリンさん大慌て。そして目を回して倒れそうに・・・

「あっ! わわっ! ふわあああ!」

まずい倒れる!

「ファリンさん危ない!」

俺はファリンさんを助けに走り、何とかファリンさんを片手で抱くような形で受け止めてオボン? も片手で受け止めた! 落ちると困るからチャクラで吸着する。

「ふわあ?」

どうやら気を取り戻したらしい。

「ファリンさん大丈夫ですか？」

「あ／＼う・・・うん・・・ユキトくん、ありがとう／＼」

なにやらファリンさんが赤くなっている。

おいおいそれはまずいんじゃないですかファリンさん？こっちは9歳児ですよ？

まあユエと同じ顔だし仕方ないと思うけどね？

ファリンさん騒動の後、俺たちは庭に移動しお茶会を再開した。
どうしても良いがすずかの家はネコ屋敷だな。

「しかし相変わらずすずかの家はネコ天国よね？」

どうやらアリサもそう思ったらしい。

「えへへ。」

「でも、子猫たちかわいいよね」

「ああ。犬も良いけど、ネコもかわいいよね」

「ね」

「でも、里親が決まってる子もいるからお別れもしなきゃいけない

けど。」

「そっか。ちょっと寂しいね。」

「でも、子猫たちが大きくなっていくのを見るとうれしいよ。」

俺たちがネコについて話していると、突然あたりにおかしな魔力反応がでてきた。

俺は驚いたが、すぐさまその表情をもとに戻しすずか達との話を再会した。

あの、なのはちゃん？そんな顔してるとすずか達に感づかれるよ？幸い2人は話に夢中で気がつかないけど。

なのはが俺達になんて言い訳しているか悩んでると、ユーノが何か思いついたように林の中に入ってしまった。

「ユーノくん？あっ！」

「あらら？ユーノどうかしたの？」

「何か見つけたのかも、ち・ちょっと行ってくるね？」

「大丈夫か？一緒に行こうか？」

「大丈夫だよ、ユキくん。すぐ戻るから待ってて。」

そう言ってなのはちゃんは林の中に行ってしまった。まあ今回は行かなくても良いだろ。行ってもなのはちゃんが混乱するだろうし、それに・・・

「なのはちゃん大丈夫かな？」

「まあ大丈夫だろ？・・・たぶん」

「そうね。ちょっと心配だけど。」

この2人がいるのにどうやって行けと？

なのはちゃんがユーノを探しに行ってからもう15分はたった。

「なあ。なんかなのはちゃん、遅くないか？」

「そうだね・・・大丈夫かな？」

「俺ちょっと行ってみてくる！」

そろそろ戦闘が終わってるはずだし。

「あたしも！」

「わたしも行くよ！」

「よし！じゃあみんなで行こう。」

俺達なのはちゃんを探しに林のなかへ。

この広いすずかの家を探すのは困難だろう。そこで

「スキル、白眼発動・・・」

目の周りの神経が膨張し、黒目の部分が白くなる。

NARUTOの白眼。

この眼の能力は、チャクラを目視できる他にも物体を透かして見ることができ、さらにズーム付きと変体さん達の夢を実現したような眼なのだ。・・・いやもちろん俺はまだ使っていないけどね？

俺はすずか達に顔が見えないようにしながら、なのはちゃんを探す。さて、なのはちゃんは・・・いた。どうやらここからまっすぐ行った所で気絶しているようだ。

「なのはちゃん。どこだ〜！」

白眼を解除して俺は探すフリをしながら、なのはちゃんの所に向かった。

「なのはちゃん！？アリサ！すずか！なのはちゃんがいたよ！」

なのはちゃんが目視できたところで、俺はアリサ達に声をかけてなのはちゃんの所に行った。近くにユーノもいる。

「どこにいたの？・・・なのは！？」

「どうしたの？アリサちゃ・・・なのはちゃん！？」

2人ともなのはちゃんを見つけると驚いてこちらに駆けてきた。

「ねえ！なのはどうしちゃったの！？」

「雪人君！なのはちゃんは大丈夫！？」

2人ともすごく心配している。

「……大丈夫。外傷はあんまり無いみたいだ。……とりあえずなのはちゃんを運ぼう。」

俺はそう言って、なのはちゃんを抱きかかえる。一般的に言うお姫様だった。

「うわー。雪人君、ダイタン／＼／」

なんて声が小さく聞こえてきたが気のせいだ。

俺はなのはちゃんを抱きかかえたまま屋敷の中に運んでいった。……恭也さんがまた殺気立ったが。なのはちゃんが気絶しているとわかりすぐに殺気が無くなった。

なのはちゃんが起きた。アリサ達はなのはちゃんに、どうして倒れていたのかを聞いたがなのはちゃんは、ユーノを探していたら転んだと嘘をついた。

とりあえずなのはの外傷は腕を打っただけだったようでみんなホッとしていた。

暗くなっていたので、俺達は解散して家に帰っていった。
次は温泉のところか。では、高科雪人、原作に介入する！

魔法少女リリカルなのは月 7話（後書き）

はい。今回はアニメの4話を元にした作品です。

雪人君何もやってません。

ついでのなのは戦闘描写もありません。巨大なニャンコも出てきません。すいません。

しかし、次は温泉の話です。雪人君がフェイトに会います。戦います。フェイト良いですね。

感想があれば投稿していただけると嬉しいです。

これからも異世界冒険譚をよろしくお願いします。

魔法少女リリカルなのは月 8話

ついに会った運命の名を持つ魔法少女

初めて会った彼女は機械のように冷たい瞳をしていた・・・

俺はなのはちゃんだけじゃなく彼女にも幸せになってもraitai・

・

そう思うのは傲慢なことだろうか・・・

魔法少女リリカルなのは月・・・はじまります。

y u k i t o s i d e

今日は連休。年中無休の喫茶翠屋も連休の日は他の店員に任せて家族旅行に行ったりする。

高町家と月村家（メイドさん達も）、そして俺とアリサで連休中にお温泉に行って日ごろの疲れを癒そうという。いつものプランだ。

ちなみに俺は、アニメでユーノのケースが置いてあった場所に座っている。

宿に着いた俺達は、荷物を置いて、温泉に入ろうということになった。

士郎さんは跡で入るらしく桃子さんと散歩に行ってしまった。

そんなわけで俺は恭也さんと一緒に入ることにして温泉のほうに行
ったが……

「キューー！」

「あきらめなさい！ ユーノ！ あんたは私たちと一緒に入るのよ！」

アリサとユーノが格闘していた。

俺はユーノを助けるか迷ったが、ユーノに1人だけうまい思いをさせるのも癪なのでユーノに話しかけた。

「ユーノ。そっちが嫌ならこっちで一緒に入るか？」

「キュ！ キュキュ！」

ユーノは高速で頭を縦に振っている。

「そういうわけだ。アリサ。ユーノを離してあげろ。」

「嫌よ！ ねえユーノいつもかまってくれないユキトより私達と一緒に
に入るわよね？」

「キュキュキュ！」

今度はさっきより速く横に振っている。

「そんな〜」

「ほらユーノこっちに来い。じゃあユーノは後で渡すから。」

そう言って俺と恭也さんは、温泉に入っただけだった。

俺は温泉で自分の身体を洗ったあとユーノを洗い始める。

「どうだ〜？気持ちいいかユーノ？」

「キュ！」

「ははは。そうか。」

頭から尻尾まで一通り洗い終わった後。

「ユーノ。お湯かけるから気をつけろよ？」

「キュキュ！」

お湯をかけて一緒に風呂に入った。・・・そういえばここフェレットを入れていいのか？

温泉から出た俺は、なのはちゃん達を待ちながらマッサージ器に座っていた。

「あゝ・・・」

「枯れてるわねーあんだ。」

「ア・・・アリスちゃんそんなこと言っちゃだめだよ。」

「よう。アリスにすずか、なのはちゃん。すずか、そう言うってことは、お前も俺が枯れていると思ってるわけだな？」

「そんなことないよ!・・・雪人君!ひどいよ」

俺がニヤニヤしているのを見てすずかは俺にからかわれたと気づいたらしい。

俺がマッサージ器から降りて、なのは達とこの後どうするかを話している。

「はぁーい。おちびちゃん達。」

前から声をかけられた。

こいつはアルフだな。オレンジ色の髪の毛、そして額の宝石、間違いない。

「ふむふむ。君かね?うちの子をあれしてくれちゃったのは。」

なのはちゃんが怯えていたので俺はなのはちゃんの前に出る。

「いきなり何なんですかあなたは!・・・なのはちゃん、知り合いの人?」

なのはちゃんは首を横に振る。あ、知ってるけど。それを聞いて俺

はアルフをにらみつける。

その瞬間、俺は面白いいたずらを思いついた！

（全く何なんだこの人は・・・いきなり因縁つけてきて。酔っ払いか？だとしたら本当に迷惑だな。・・・早くどこかに行けよ、おばさん！）

そう、念話を全方位に向けて発したのだ！

なのはちゃんが驚いた顔をしてこちらを見ている。

「な！？なんだと！このガキンちょー！」

「うわっ！？いきなり何するんですか！？やめてください！」

やっぱりアルフも女性だったようで掴み掛かってきた。いきなり念話で罵倒されれば誰だって怒るか。

「そうよ！いきなりなにすんのよ！」

「くっ！・・・邪魔したね！」

さすがに、分が悪いと思ったのか。アルフは俺達を通り過ぎて向こうに行ってしまった。

その時なのはちゃんとユーノに念話を飛ばしていたようだが、たぶん脅しだろう。

「なんなのよー！今のはー！」

さて、アリサをなだめますか。

side out

nanoha side

（全く何なんだこの人は・・・いきなり因縁つけてきて。酔っ払い
か？だとしたら本当に迷惑だな。・・・早くどこかに行けよ、おば
さん！）

その念話が聞こえてきたときに、わたしはびっくりした。だってそ
の念話はユキくんから聞こえてきたんだもん。

（ユ・・・ユーノくん！今の聞こえた！？）

（うん。聞こえたよなのは。）

（もしかして、ユキくんも魔法使いなの！？）

（・・・ううん。今、魔力量を調べてみたんだけど、なのはがA
Aランクだとして・・・彼は、Eランクくらいの魔力しかない。
だから彼は魔法使いじゃないと思う。おそらく、無意識に思ってる
ことが念話に出ちゃったんだね。）

そっか・・・ユキくんは魔法使いじゃないんだ。ちょっと残念なの。
でもユキくん、女の人にそれは、ひどいと思うよ？

そんなことを思っていると女の人がかつちに歩いてきた。

（今のところは……挨拶だけね。忠告しておくよ？子供はい子にしてお家で遊んでなさい！おいたが過ぎるとガブツといくよ？……あの小僧にもそう伝えておきな！！）

ふえええ。やっぱり怒ってるよう。でも今の人、この前の女の子の知り合いなのかな？

あ！アリサちゃんが怒ってる。ユキくん、何とかして！！

side out

FATE side

ジュエルシードを探索しているとアルフから念話が届いた。この前の女の子を、偵察しに行ってもらったんだけどどうだったのかな？

（アルフ、どうだった？）

（どうだったもこうだったも無いよ！！あの小僧あたしの事をおぼさんって呼びやがって！今度あったらただじゃおかないよ！）

え？小僧？どうして男の子の話をしているんだろう？もしかしてあの子本当は男の子だったのかな？でもスカート穿いてたし……

(フェイト!?聞してるのかい!?)

(あ!うん聞してるよ。)

(それであの小僧は・・・)

この後アルフの機嫌が直るまで、あの女の子の話は聞けませんでした。

side out

yukito side

それからは、夜になるまで特に何事も無くすごした。

「・・・あ・・・」

ジュエルシードの魔力を感じ取り、なのはちゃんは起き上がる。どうやらジュエルシードのところに行くようだ。

なのはちゃんが行った後、俺も起き上がって髪を伸ばし、装備をつけジュエルシードのほうへ向かう。

見つけた!フェイトとなのはちゃんだ。

「だから！そういうことを簡単に決め付けないために話し合いって必要なんだと思う。」

「話し合うだけじゃ。言葉だけじゃ何も変わらない。伝わらない！」
そう言ってフェイトは、なのはちゃんの後ろに回り込んで切りかかる。

——ガキィ！！

俺はそれをライオンハートで防ぐ。

フェイトはいきなりの俺の登場で驚き距離をとる。

「あなたは！この前の！」

どうやらなのはちゃんはこの前のことを覚えていたようだ。
俺はエミヤシロウを意識して声を出した。

「やれやれ。不自然な魔力を感じてここに来てみたが。まさか魔法少女と出会うとはな・・・」

「・・・何者？その子の仲間？」

「ふっ。違う。ただ・・・その子はこの前、世話になったのですね。その子と戦いたいと言うのならまずは、私を倒してからにしましょう。」

「あなたとは・・・戦う理由がありません。そこをどいてください。」

「・・・これでもかね？」

俺は懷から聖骸布を取り出し、その中にあるジュエルシードを見せた。

どこで手に入れたかって？この前偶然見つけて拾っておいたんだよ。

「それは！」

「その反応。やはりこれを集めていたか。」

「・・・それを渡して下さい。」

「・・・嫌だといったら、どうするかね？」

「っ！」

フェイトは戦うことを選んだようだ。俺の目の前からフェイトが消える。後ろに回りこまれたか！？
だが・・・甘い！

「写輪眼！白眼！・・・ふっ！」

——ガキン！

「な！？」

俺は写輪眼と白眼を発動しフェイトの攻撃を正面を向いたまま防ぐ。

俺はフェイトのほうを向いて話しかける。

「ふむ……いきなり攻撃を仕掛けてくるとはな。ではこれを1個ずつかけて戦うのはどうかね？私が負けたら、これを君にあげよう。しかし君が負けたら、これを1個私に渡す……というのは。」

「……良いです。私は負けませんから。」

「たいした自信だ。……では今度はこちらから行くぞ！」

俺は瞬動でフェイトの後ろに回りこみライオンハートで切りつける。

「くっ!?!」

フェイトは少し驚いたようだが、それを避けて俺に反撃をしてくる。

「ふっ!はあ!せやあっ!」

「くっ!……なかなかの連撃だ。……だが甘い!」

俺はフェイトの攻撃を弾いて反撃を開始する。

「アバン流刀殺法!海波斬!大地斬!」

「くっ!?!…うあっ!」

速い攻撃でフェイトの腕の動きを止めて、重い攻撃でバルディッシュを払う。

バルディッシュを横に払われたフェイトは体勢を崩した。

「そこだ！」

「カハッ!?」

俺はフェイトに蹴りを入れると同時に距離をとり呪文を使う。

「カイザーフェニックス！」

俺の手のひらから大きな火の鳥が出てフェイトに向かって飛んでいく。

「デバイスの補助なしで魔法を!?・・・くっ!?」

フェイトは飛行魔法を発動させ上空に逃げる。

「今のも避けるか!だがそろそろ終わりにしよう!」

俺は体勢の崩れたフェイトに瞬動で近づき剣を突きつけ、魔力の玉を出しながら縦回転する。

1回転し終わったところで俺はライオンハートの引き金を引いた。

「エアリアルサークル！」

——ズドン！

「きゃあああ！？」

魔力の玉が外方向に炸裂し、フェイトは防御したようだが地面に叩きつけられる。

「くう・・・」

フェイトは起き上がろうとしているが、俺はフェイトの後ろに降り、ライオンハートを首にあてる。

「っ！？」

「チェックメイトだ・・・私の勝ちのようだな？」

『PULL OUT』

「バルディツシュ！？」

バルディツシュがジュエルシールドを1個吐き出した。

「どうやら君の武器は主人思いのようだな？これは貰っていくよ。」

「・・・わかりました。・・・アルフ行くよ。」

「フェイト！？・・・覚えておきなよ！？」

アルフはこちらを睨んでいる。

フェイトが帰ろうとすると、なのはちゃんはフェイトを呼び止めた。

「まって！あなたの名前は？」

「・・・フェイト。フェイト・テストロッサ。あなたはもう私たちの前にもう現れないで。」

そう言ってフェイトは飛んで行ってしまった。

さて俺も帰るとするか。そう思い帰ろうとすると、ユーノが呼び止めてきた。

「まって！それは危険な物なんだ。だから、僕達に渡してくれませんか？」

「断る。」

「ど・・・どうしてですか！？」

「これが危険な物だとは判っている。これほどの魔力なのだからな。」

「なら・・・」

「だからこそ、君達のような子供に渡すことなどできん。第一、君達がこれを危険なことに使わないと、初対面の私にどうして言える？」

「そ・・・それは・・・」

「わかったかね？なら、私は帰らせてもらう。」

俺が帰ろうとすると今度はなのはちゃんが話しかけてきた。

「待ってください！・・・あの！この前はありがとうございます。」

「ふむ・・・気にしなくて良い。あのまま町に被害が出れば私の大切な者たちにも被害が及びそうだったので止めただけだ。」

「それでも、ありがとうございます。」

「ふむ・・・感謝の気持ちは受け取っておこう。」

そういつて俺は帰ろうとする。

「あ・・・あの。私の名前は、高町なのはって言います。あなたのお名前は？」

「・・・わけあって名は言えないがユエ、と呼んでくれ。中国語で月を意味する」

その言葉を言う俺は林の中に入っていく旅館に向かう。

そして服と髪を元に戻して布団にもぐりこんだ。

side out

nanoha side

「ユエ・・・さん・・・か」

仮面越しだったけど綺麗な人だったな。

「フェイトちゃん・・・か」

私は月を見ながら思い出していた。

「なんであんなに寂しそうな目をしてたんだろう・・・？」

お月様は答えてくれなかった。

魔法少女リリカルなのは月 8話（後書き）

お久しぶりです。

遅くなって申し訳ありません。

修学旅行みたのに行ってきたので更新が遅れてしまいました。

ようやく雪人君が戦闘をしましたね。これからどんどん原作に介入していきます。

これから異世界冒険譚をよろしく願います。

魔法少女リリカルなのは月 外伝

y u k i t o s i d e

今日は休日。

たまにはなのはちゃん達と行動しないでみようと思い1人で買い物に行こうと思います。

そう言うわけで俺は買い物をするためにデパートにはいっていく。

「ありがとうございます。」

ちょっと買い過ぎちゃったかな？まあ良いか。

さて次は・・・

キキィー！

「きゃあ!？」

「ちょっとあんたたちなn!？」

車が止まり、中から数人の男たちが出てきて金髪の気の強そうな女の子と、青がかった髪の大人数の女の子が車内に引っ張りこまれる。・・・アリサとすずかのことなんだけどね。

「よし!出せ!」

リーダーっぽい男が運転手に指示を出し車が走り出す。
まさかマジで人攫いの現場を目撃するとは。しかし、アリサの中の人はよく攫われるな。

ってそんな場合じゃない。あの車を追わなきゃ。

俺は人がいない道に急いで入り、気で身体を強化、低いビルの上に跳びさっきの車を探す。

「……くそっ！見失った！どうする？魔力でたどろうにもアリサたちは魔力を持ってない。探查魔法もこの町全体じゃもしかしたら手遅れになるかも……」

どうすれば良い？アリサの家の犬でも連れて匂いで探させてもすれ
ばいいのか？待てよ、匂い？そうか！

「肉体変化！嗅覚犬並み！」

俺は嗅覚を犬並みに変化させる。

「って！？くっさ！匂いがキツイ！？」

俺は悶絶した。犬並みだとこんなに匂いがわかつちゃうのか！

「うう……臭いよ（涙）。でも仕方ない。アリサたちは……」

向こうか!」

俺はアリサ達の匂いがする方へ跳んでいった。

side out

arisa side

・・・また攫われた。気をつけているのにどうして誘拐が毎度、毎度成功するんだろう?

「あんた達! あたしが誰だか分かってんの! ?」

「ええ。わかってますよ? アリサ・バニングス様。あなたのお父さんがバニングスグループの社長で、あなたを溺愛しているというのもね。」

やっぱりわたし狙いか・・・

「すずか、ごめん巻き込んだじゃって。」

「ううん。気にしないでアリサちゃん。」

「美しい友情ですね。すばらしい。ではあなたのお父さんに身代金をもらうまでここで待っていて貰いましょうか。」

「ちょっと待ってくれよ。アニキ! この子達の相手は俺がする約束だろ?」

「・・・ふう。・・・好きにしろ。」

「へっへっへっ。アリサちゃん遊びましょう。」

「ひっ!?! なんなのよコイツ!?!」

「ああ。すみませんね。そいつロリコンなんです。だからあなたみたいな年頃の子が大好きなんですよ。」

なんですって!?!

「や・・・来ないで!」

その言葉もむなしく変態がやってくる。

(誰か・・・助けて!)

そのとき、

バァン!

と扉が開いて男の子が出てきた。白くて長い髪、黒い仮面、そして豪華な服を纏っていた。そいつは腕を組みながら、こう言った。

「女性を守るべき手を女性に向け、女性を欲望のはけ口にしようとするもの・・・人それをゴミと言う。」

「貴様! 何者だ!」

「通りすがりの仮面ライダーだ！覚えておけ！」

その人は両手をお腹辺りに添える。すると装飾がいっぱいあるベルトのような物が現れる。

右手を左上に。左手を右のわき腹辺りのベルトの上に。そして両手をゆっくりと動かす。今度は、右手を右肩の前に。左手は左のわき腹辺りに。そして・・・

「変身！」

その言葉とともに両腕を左のわき腹辺りのベルトの上に添えて、そのまま両手を正しい位置におろす。

そして彼は・・・変身した。まるで特撮のヒーローみたいに。なぜか身長まで高くなっている。

変態が離れそして犯人が私に近づいてくる。

「何のまねか知らないが、この状況が分かってるのか？こっちには人質がいるんだ！てめえ、そこを1歩でも動いてみる。この嬢ちゃんのかわいい顔に一生消えない傷ができるぞ！」

そう言って犯人はわたしの頬にナイフを添えてきた。でも、わたしはぜんぜん怖くなかった。だって目の前にいるヒーローが絶対助けしてくれる。そんな気がしたから。

「君こそ人質を盾にするというのがどういふことか分かっているのかね？」

「何!？」

「人質を盾にするということ、それはつまり目の前の敵に対して無防備になると言うこと。つまり……クロック・アップ」

彼が掻き消える。それとほとんど同時にわたしにナイフを突きつけていた犯人がまるで『誰かに吹き飛ばされた』かのように空を舞う。

「くぁwせdrftgyふじこlp;@!？」

犯人が倒れると同時に彼が現れる。

「最悪の選択肢なのだよ。」

すごい、かっこいい! 何をしたのかは分からないけど、かっこいい!

「さて最後は、君だけのようだ、ロリコンの名をかたった犯罪者。君のようなのがいるから。全国のロリコンと言う名の紳士諸君に被害が出るのだよ。」

「え?」

コイツ、何言ってるの?

「まったく、さっきの男も何がロリコンだ。そもそも少女と言うのは愛でるのが正しい愛し方だというのに。真のロリコンは君のように手を出したりしない。遠くから見ているだけで、幸せなのだ!」

コイツはちよつとかつこいいと思ったのに

「まあ良い。君はすごく痛い目を見てもらおう。・・・・・・なあに痛いのはたったの237回だよ。」

「ひい！ひいひい！」

変態はすごく怖がっている。彼は変態に近づいていつて。

「無駄！無駄！無駄！無駄！無駄！無駄！無駄」

「さて、大丈夫かね？ さつき警察を呼んでおいたから、もうそろそろ来るはずだ。下の階にいる奴らも伸しておいたから、ここに来ることは無いよ。」

彼がそう言い、変身を解いて元の姿に戻った。変態は色々に変形していた。

「べ・・・別にあんたみたいな変態にありがとうなんて言わないんだからね！」

「もう！アリサちゃん！ありがとうございます。」

「気にしなくて良い。さて、私は帰るとするよ。」

彼が、帰っちゃう。もう会えないかも知れない。そんなの嫌っ！

「ま・・・待ちなさいよ！」

「・・・何かね？」

彼は私を見てそう言った。

「あ・・・あんたの名前は？」

「私の名前はユエ。別に覚えなくて良い。」

そう言って彼は窓から外にいつてしまった。

「ユエ・・・か。」

「また会えると良いね？アリサちゃん」

「・・・うん」

そしてわたし達は警察に保護され家に帰れた。

今日の出来事をあいつにいったらきつと悔しがるだろうな。

だって、ヒーローと一緒に戦うことはあいつの夢なんだもん。

早く明日にならないかな？

魔法少女リリカルなのは月 外伝（後書き）

お久しぶりです。作者です。

今回はアリサちゃんとすずかちゃんが攫われるお話です。

すずかちゃんの正体が・・・ではなくて普通にアリサちゃんが目当てでした。

すずかちゃんの方はやってはみたかったんですが、設定とかよく知らないんで断念しました。

ちなみに雪人君が変身したのはクウガです。カブトじゃないです。

それでは、これから異世界冒険譚をよろしくお願いします。

魔法少女リリカルなのは月 9話

2人の魔法少女に出会った俺、

高科雪人は、ようやく原作に介入した。

運命はここから変わる。変えてみせる。

それは大切な人のために・・・これから大切になるかもしれない人のために・・・

魔法少女リリカルなのは月・・・はじまります。

y u k i t o s i d e

あの温泉の一件の後、なのはちゃんは目に見えてふさぎこんでいる。たぶんフェイトと話し合えなかったことが堪えているんだろう。

でもそろそろ何とかしないと、アリサの堪忍袋が・・・

「いい加減にしない！」

あ・・・破裂した・・・

「こないだから、何話しても上の空でボーっとして！」

「ご・・・ごめんね。アリサちゃん。」

「ごめんじゃない！わたし達と話してるのがそんなに退屈なら、一人でいくらでもボーっとしてなさいよ！いくよすずか。ユキト！」

「ア・・・アリサちゃん。・・・・あつ、なのはちゃん・・・。」

「いいよ、すずかちゃん。今のはなのはが悪かったから。」

「そんな事無いと思うけど。とりあえずアリサちゃんも言いすぎだよ。少し話してくるね？」

そう言ってすずかはアリサを追っていった。

「ユキくんは・・・行かないの？」

「俺はいいよ。それでなのはちゃん。この前も聞いたけど、それは話せないことなのか？」

「うん・・・ごめんね。隠し事なんかしちゃって・・・。ユキくんも嫌な気分になっちゃうよね・・・。」

すごいオーラだ。なのはちゃんの周りだけ暗くなっている。

「そんなことないよ。」

「でも・・・友達に隠し事なんて・・・。」

「なのはちゃん。あるお姉さんが言っていた。友達だからって言いたくないことや、思い出したくないこと、悲しかったこと、失敗したこと、それを全て話さなければならぬなんてことは無い・・・って。だから、君が話せないんだったら話さなくても良いし、話せるんだったら話せば良い。真実をばかしながらも、たとえば話でもね？」

「ユキくん……でも、ごめんなさい。」

「そっか。話せないか……。これだけは覚えておいて、アリサはなのはちゃんが心配だから、悩みを相談してほしかったから、あんなことを言ったんだ。」

「……うん。」

俺はなのはちゃんのそばに居た。アリサにはさすががついている。だからなのはちゃんには、俺がついていようと思ったんだ。

夜

「さて、確か今日だったよな、フェイトとなのはちゃんの3回戦目は。」

あまり記憶力に自信は無いけど、アリサとなのはちゃんのケンカがあったから今日だと思う。

「っ!？」

ジュエルシードの魔力を感じた後、それを他の魔力で覆うのを感じた。

「そろそろ行くか。」

俺は髪と服をユエモードにして、仮面を装備する。そのまま俺は夜の闇の中へと飛び込んでいった。

side out

nanoha side

わたしは学校から帰った後、ユーノちゃんとジュエルシード探索に出かけました。

「あゝ・・・タイムアウトかも。そろそろ帰らないと・・・。」

ジュエルシードを探していましたが一向に見つからなくて、もう夜の7時になっちゃいました。

「大丈夫だよ。僕が残ってもう少し探していくから。」

「うん・・・ユーノくん1人で平気？」

「平気。だから晩御飯取っというてね？」

「うん。」

わたしはユーノくん「じゃあね」と手を振りながら。家への道を走りました。

（アリスちゃんとすずかちゃんそろそろお稽古が終わって、帰る頃かな？）

わたしはそう思って、携帯を開いてメールが来ているか確かめたの。
・・・新しいメールは無かった。

side out

FATE side

「大体このあたりにあると思うんだけど、大まかな位置しかかわからないんだ。」

「はあ。確かにこれだけゴミゴミしてると探すのにも一苦労だね。」

仕方ない・・・か

「ちょっと乱暴だけど、周辺に魔力流を打ち込んで強制発動させるよ。」

私はそう言って魔力を・・・

「あー待った。それあたしがやる。」

準備をしようとした時、アルフがそうやってきた。

「大丈夫？結構疲れるよ？」

「このあたしをいっただい誰の使い魔だど？」

「じゃあ、お願い。」

「そんじゃあ！」

そういつてアルフは周辺に魔力を打ち込んだ。

ジュエルシールドが発動する気配がする。じゃあ早く封印しようか。お母さんのためにも。

side out

nanoha side

「ッ!？」

辺りに魔力が流れるのを感じた次の瞬間、ジュエルシールドの魔力を感じた。

わたしはその魔力を出している場所に向かう。もしかしたら、あの子がいるかもしれない。

「レイジングハート！お願い。」

『セットアップ。』

レイジングハートがそう言うとなわたしはバリアジャケットを纏って、杖を持っていた。

レイジングハートをセットアップすると、ユーノくんから念話が来た。

（なのは、発動したジュエルシードが見える？）

（うん。すぐ近くだよ。）

（あの子達も近くにいるんだ。あの子達より先に封印して！）

（わかった！）

そう言うわたしはレイジングハートをシーリングモードにして封印する準備をはじめた。

ーードオン！

という音とともにわたし達はジュエルシードに封印の魔法を撃ったの。

ジュエルシードにわたし達の魔法が当たって、宙に浮く。

「リリカル！マジカル！」

「ジュエルシードシリアル？？！」

「「封印！」」

封印魔法が放たれ、それを受けたジュエルシードは沈黙する。

ジュエルシードに近づいていく。

わたしはそのときアリスちゃん達との出会いを思い出していた。

私がアリスちゃんを叩いちゃって、アリスちゃんとケンカになっちゃって、すずかちゃんが止めてくれた。あのときを。

アリスちゃんやすずかちゃんとも初めて会ったときは、友達じゃなかった。話をできなかったから、分かり合えなかったから。

アリスちゃんを心配させたってユキくんが言ってたけど、それもわたしが本当の気持ちを、思っていることを言えなかったから。

「やった！なのは！早く確保を！」

「そうはさせるかい！」

そう言って狼さんがわたし目掛けて落ちてきた。

ユーノ君がとっさに守ってくれて、助かりました。

プロテクションが割れると、そこにはフェイトちゃんが居た。

「この間は自己紹介できなかったけど。わたしなのは、高町なのは。私立聖祥大附属小学校3年生。」

わたしが自己紹介すると、

『サイズフォーム。』

フェイトちゃんのデバイスが鎌の形になった。

「あっ!？」

わたしはレイジングハートを構える。どうしてあなたはそんなに寂しそうな目をしているの？

わたしがそう思っているとフェイトちゃんが距離を開ける。

やっぱり戦わなきゃダメなの？

フェイトちゃんが仕掛けてこようとしたとき、彼の声がした。

「やれやれ、また会ったね。魔法少女、そして使い魔の諸君？」

わたしに仕掛けてこようとしたフェイトちゃんが止まって、声のしたほうを見る。そこには……

side out

yukito side

「あなたは……」

「ユエさん!」

フェイトとなのはちゃんは突然の俺の登場に驚いている。

どうしたものか・・・とりあえず俺がジュエルシールドを狙っている。
という印象でもつけますか。

「さて、それを渡してもらおうか。」

「っ!？」

「ユエさん!？」

俺はジュエルシールドを指差しながら言った。

「それをよく調べてみたら、それは『持ち主の願いを叶える』という、厄介な性質であることが分かったのね。悪人の手に渡って世界征服がしたい、などという願いでもされたら面倒だ。私が嚴重に処分しようと思ってね。」

俺がそう言うと、フェイトがサイズフォームで切りかかってきた。

「そんな事、させない!」

「写輪眼!白眼!そしてトレース・オン。」

創造の理念を製作し、基本となる骨子を偽造し、

構成された材質を創造し、製作に及ぶ技術を抽出し、

成長に至る経験を偽装し、蓄積された年月を想像し、

あらゆる工程を幻想と成し、

ここに、幻想により創造される剣を成す！

「是、万死ヲ刻ム影。」

そう、hack／G・Uの主人公ハセヲが使った。死の恐怖を宿す大鎌。それでフェイトの攻撃を受け止める。

ガキン！

「鎌！？」

同じ武器を出されて驚いている。

「驚いている暇はないぞ！」

「くっ！？」

俺は、大鎌の重さを使って、円を描くように、フェイトに攻撃する。がフェイトは俺の範囲の外に離れてしまう。そして俺はこう言った。

「・・・いいのかね？わたしに構っていはあの子があれを捕っていってしまうぞ。」

「くっ！？アルフ！」

「OKフェイトこいつは任せて、早くその子を申しちゃいな！」

まずは、ジュエルシールドをすぐ近くにいる彼女から、とも思ったんだろう。そう言ってアルフは俺に、フェイトはなのはに向かって

いく。

「フェイトの邪魔をするな！」

そう言いながら、アルフが人型になって襲い掛かってくる。

「そらそらそらそら！」

目にも止まらないコブシの連打。俺も負けじと大鎌の柄でコブシを
そらす。

「そらあっ！」

「くっ!?!」

アルフからの1撃に俺はたまらず武器を取り落とした。

「……なかなかやるようだな？」

「当然！あたしはフェイトの使い魔だからね！あんたもなかなかだ
けど、武器が無くちゃ戦えないだろう？」

「ふっ……残念ながら……私は武器より素手のほうが強い。」

嘘です。普通人は武器を持っている時より素手の方が強いとかない
から。

「言うねえ。じゃあこっちも本気で行くよ！」

「来たまえ。」

「はあああ……おりゃあ！」

「くっ！……正拳突き！」

アルフが攻撃をしてくる。俺はそれを写輪眼の動体視力で避け、アルフに正拳突きを放つ。

「甘いよ！」

「何ッ！？」

その攻撃は予測されていたようだ。俺の攻撃はアルフのプロテクションに阻まれ、アルフに届かない。

「そりゃあ！！！」

アルフが大振りの一撃を放つ。大振りだったため、何とか避けて距離をとる。

「どうだい？武器が無いんじゃ、この防御は貫けないよ！大人しくしてな！」

「甘いな……私が君たちに対して有効な手が無い……とでも思ったのかね？」

「何ッ！？」

そう俺は魔導師対策として、影分身たちと協力しながら案を練っていたのだ。

俺はアルフへ向かっていく、対するアルフはプロテクションを張り俺を迎え撃とうとしている。

「これが答えだよ。2重の極み！」

俺はアルフのプロテクションにすばやく2撃を叩き込む。

パキン！

「くうう！？」

2重の極みをプロテクションで受けたことにより、アルフの腕に衝撃が走る。あの腕は少しの期間使えなくなるだろう。

アルフが腕の痛みで大きくのけぞる。そこに俺は追撃を仕掛ける。

「食らいたまえ。某元いじめられっ子の必殺技を……。手刀横顔面打ち！連続ティーカオ！单把！背負い投げ！最強コンボ2号！」

アルフの側頭部への手刀、腹部への連続の飛び膝蹴り、両手を重ねてアルフに叩き込み、背負い投げで背中から落とす！

「カハッ！！」

「……。私の勝ちのようだな。」

アルフは今のコンボのダメージで動けない。俺はなのはちゃん達の方へ向かうとした瞬間。

ガキィ！

「へ？」

なのはちゃんとフェイトが、レイジングハートとバルディッシュで
ジュエルシードをはさんでいた。

マズイ！

俺がそう思った瞬間には、レイジングハートとバルディッシュには
ひびが入り、そしてジュエルシードからは白い魔力が放たれる・・・

魔法少女リリカルなのは月 9話（後書き）

とりあえずアルフをふるぼっこにしてみました。

二重の極みが出ましたね〜フタエノキワミアー！とどちらにしようか迷いましたけど・・・

万死ヲ刻ム影はネタで出しました。ハセヲ君カッコいいですよね。悪い子っぽい主人公が大好きです。

それでは、これからも異世界冒険譚をよろしくお願いします。

あ！あと感想も待ってます！

魔法少女リリカルなのは月 10話

俺はジュエルシードの暴走から彼女達を守った。
でも、自分自身を守れなかった。
そして物語は急展開をむかえる。

魔法少女リリカルなのは月………はじまります。

y u k i t o s i d e

目の前では原作のようになのはちゃんとフェイトがデバイスでジュエルシードを挟んでいる。

俺はジュエルシードの中の魔力が高まったのを感じて飛び出す。
ジュエルシードの魔力は今にも暴発しそうだ。

「ちっ！間に合え！トレースオン！ロー・アイアス！」

ロー・アイアスをなのはちゃんの前に投影する。

フェイトの前に移動して

「ATフィールド！全開！」

ATフィールドを張るが……

——ピキッ！……ピシ……ピシ……

（そんな！？ATフィールドが破れる！？）

——パキイン！

ATフィールドが割れるとともに凄まじい魔力の奔流が俺とフェイトを襲う。

（俺は何とかなる、だからフェイトを助ける……！）

俺はフェイトを抱きしめて対魔法防御を全開にする。

s i d e o u t

F A T E s i d e

ジュエルシールドが暴走したとき、私はもうだめだと思った。

そのとき、彼がわたしの前に来て、六角形のフィールドを張って魔力流を防いだ。

（どうして私のことを……あなたと私は敵同士なのに……）

彼が張ったフィールドもそろそろ碎ける。

碎けたと思ったら彼が私を抱きしめてきた。どうやら身を犠牲にしてまで私を守るらしい。

（どうして？）

ジュエルシードの魔力が収まったとき、彼が私から離れ地面に落ちていく。

私は彼を見捨ててジュエルシードのところへ向かった。

ジュエルシードの封印が解けている。バルディッシュも今は壊れていて使えない。私はお母さんのためにジュエルシードを両手で包み封印を試みる。

ジュエルシードの光が手からこぼれる。

（止まれ・・・・・・止まれ止まれ。）

私は何度も念じる。ジュエルシードの魔力で手袋が破れ、手に痛みが走る。

私がそう念じていると、彼が起き上がってきた。背中では傷ついて血を流し、髪は所々焦げ、ふらふらしながらもゆっくり彼はこちらに近づいてくる。

「ユエさん！？動いちゃダメです！」

高町なのはがそう彼に言う。しかし、彼は、ゆっくり、一步一步こちらに近づいてくる。そういえば彼もジュエルシードを狙っているということをお願い出し。私はジュエルシードに、早く止まってくれと願った。

その願いを聞き入れたかのように、ジュエルシードはその活動を停止する。しかし彼は、私の目の前に来ていた。

——ガシッ！

彼は私のジュエルシードを持っている手を包むように握る。

私は振り払おうとしたが、彼が言った言葉にできなくなってしまった。

「大・・・丈夫・・・だ、何も・・・しな・・・い。」

彼は、目をつぶって、

「ベ・・・ホマ。」

すると私の手にあったジュエルシードを封印するときに来た傷や、背中にあった傷が治っていく。

彼の方が辛いはずなのに。どうして、という言葉が頭の中で繰り返される。

「どうして？ 私達は敵同士なのに・・・」

すると彼は。

「さて・・・な。つい・・・体が動・・・いて・・・しまっ・・・た。」

そう言って彼は倒れる。どうやら気絶したようだ。

「ゲホッ！ゴホッ！・・・フェイト！こいつに何かされなかったかい！？」

いつの間にか起きてたアルフが、彼を警戒しながら近づいてくる。

「アルフ・・・大丈夫、何もされてないよ。」

「本当かい？なら良いんだけどねえ。」

私が無事だったので安心したようだ。

「アルフ、帰るよ。その人を運んでくれる？」

「な・・・なんでさフェイト！？コイツは敵だよ！？」

アルフは驚いた顔をして私に質問してきた。

「その人は私を助けてくれたから、だから・・・」

「ああ！もうわかったよ！・・・っう！」

「アルフ！？大丈夫？」

「ご・・・ごめんフェイトそいつとの戦闘で右手が・・・」

どうやらアルフは彼との戦闘で右腕を痛めているらしい。

「いいよアルフ。私が運ぶから。……よいしょ。じゃあ行くよアルフ。」

「はいよ！フェイト！」

私は彼を背負いながら跳ぶ。

「あ！ま……待って！」

そう彼女が言ってきた様な気がするが気にしないで家への道を急いだ。

遠見市 住宅街

マンションに帰ってきた私達

「これで良し。」

「アルフ、この人は大丈夫かな？」

「回復魔法もかけておいたから死ぬことはないと思うけどね。この傷、結構深いんだよ。」

「……………」

「あ……フェ、フェイトのせいじゃないよ！」

「ううん。これは私のせいだから・・・。」

「フェイト・・・。」

私は明日おかあさんに報告に行かなきゃならないのに彼を見ていた。アルフがもう寝たほうがいいって言ってきたけど、なぜか彼が気になったんだ。

私が彼を見ているとアルフが思い出したように言った。

「そういえばコイツ。なんで仮面なんか着けているんだろうね？」

そういえばそうだ。なぜ管理外世界で仮面を着けて正体を隠すんだろう？

「ねえ、フェイト。」

「？」

「コイツの仮面。取ってみないかい？もしかしたら面白い顔なのかもしれないよ？」

「え？だ、だめだよアルフ！失礼だよ！」

私は彼が起きないように小声で言った。気になるけど・・・それはダメ。

「良いじゃないか。それにほら、寝るのには仮面が邪魔だろうし、もしかしたら仮面の下が治ってないかもしれないじゃない。」

「う・・・そ、そうだね！ちょっと邪魔かもしれないし、はずそうか。」

そう言って私は彼の仮面に手を伸ばす。

「・・・はぁ・・・はぁ・・・」

彼が起きないように静かに仮面に手を伸ばす。緊張で息の音が大きくなる。そして私は彼の仮面を・・・

——パンツ！

「触るなっ！」

取れずに彼に振り払われた。

「フェイトッ！あんた・・・。」

怒られた。手の痛みは関係なくなぜか、涙が出そうになる。

「あっ・・・すまない。驚いて手が出てしまったようだ。・・・どうしてこれを外そうとした？」

「フェイトは悪くないよ！あたしが悪いんだ！」

「ア、アルフは悪くないよ私がやろうとしたんだし。」

私達は同じようなことを彼に言う。

「あゝっと。状況が解らないのだが、なぜ君たちはこれを外すという考えになったのだ？」

彼は少し戸惑いながらそう言った。

「あたしが、あんたが寝るのにそれは邪魔だって、治療してないところがあるかもって、言ったんだ！だからフェイトは。」

「それでも。それを実行したのはわたし。だから悪いのはアルフじやなくて、私なんです。」

「フェイト！」

「2人とも少々落ち着いてくれないか？別に私は怒るつもりは無い。」

「だ、だけどさ！」

「君たちは私のことを思っでしょうとしたことだろう？」

私達は同時に頷く。

「なら、私が怒るのは筋違いだ。手を払ってしまったことは謝ろう。すまなかった。」

そう言って彼は頭を下げてくる。

「そんな！いいですよ。」

side out

yukito side

気がつくとは街中ではなく室内だった。

「それで、ここはどこだ？」

「ここは、私たちの住んでるマンションです。あなたがあの後倒れてしまったので、治療をするために此処へ。」

どうやらフェイト達がここに連れてきたらしい。敵である俺を。

「そうか。では君は命の恩人、といったところか。」

「え？」

「あのままあの場に居たら、ありえないと思うが、彼女たちに何かされていたかもしれないのでね。」

まあ、絶対にそれだけは無いらうけど、とりあえず言うておく。

「ふむ・・・お礼っていうのはなんだが。これを君達にやろう。」

そう言うって俺は懐からある物を出す。

「それは！」

「ジュエルシード！」

「この名称かね？では、ジュエルシードとやらを君達に。」

「え！？で、でも・・・」

「遠慮する事はない。命が助かったと思えば、安いものだ。」

そう言って俺はジュエルシードを1個、フェイトたちに渡す。

「あ、ありがとうございます。」

「気にするな。」

「あ！もうそろそろお母さんに報告に行かなきゃ。」

「・・・そうだね。」

フェイトは思い出したように。アルフは嫌々といった感じに言う。

「む？君達は母親に言われてジュエルシードを集めているのかね？」

「え！？あっ・・・あの！今は・・・」

「・・・大丈夫だ。今、私は何も聞かなかった。」

「・・・そうですか。ありがとうございます。」

「それで？母親の所に行くのだろう？どうやって行くのだ？」

「転移でいきます。」

そうフェイトは言う。あれ？それって言っちゃっても良いのか？まあ良いや。

「そうか・・・なら私もそろそろ帰るので途中まで送っていいこう。」

そう言って俺は立ち上がる。

それを見て、フェイトが慌てて止めてくる。

「え！？ダメですよ！じっとしていなきゃ！」

「大丈夫だ。」

「大丈夫じゃないです！死んじやうくらいの怪我をしてるんですよ！？ここで休んでください。」

「そうだよ。悪いこと言わないからここで休んでいきな。」

「心配するな。なにも怪我を負ったまま移動するなどしない。移動するのは回復してからだ。」

俺は目を閉じ、魔力を身体に満たして呪文を唱える。

「ベホマ」

すると傷がどんどん治っていく。

「すごい。」

その様子にフェイトが驚いている。
その間に傷が完全に回復した。

「さて、では行くでしょう。」

俺達は屋上に行き、転移の準備をした。

「む？テストロッサそれはなんだね？」

俺はフェイトが持っている箱を指差しながら、質問した。

「これですか？母さんへのお土産なんです。」

「甘いお菓子か。・・・こんな物あの人は喜ぶのかね？」

「解ないけど、こういうのは気持ちだから。」

「そうだな。普通、贈り物をされて嫌がる人間はいないだろう」

「ふん。」

アルフが不思議そうな顔でお土産を見ている。

「あの・・・少し離れていてくれませんか？」

「ふむ？・・・そうだな。正体不明の人間が転移する前にいたら嫌だろう。わかった。離れていよう。」

そう言って、俺は離れていく。気で耳を強化して離れているフェイトの声を聞こえるようにする。

フェイトは、声が聞こえない所まで俺が離れたのを確認すると、転移する場所を唱える。

「次元転移。次元座標、876C 4419 3312 D699
3583 A1460 779 F3125・・・開けいざな
いの扉。時の庭園テストロッサの主の下へ。」

フェイトたちは転移していった。

さて、俺も行くか。

side out

nanoha side

今日はユキくんが学校に来なかった。

先生にも連絡をしていないらしい。

「どうしたんだろ？あいつ。」

「心配だね。何もないと良いんだけど・・・」

アリサちゃんもすずかちゃんも心配している。

学校の帰り道、いつもはユキくんが隣にいて・・・。

どうしたんだろう？ユキくん大丈夫かな？そういえばユエさんも、あの後大丈夫だったのかな？・・・あれ？ユキちゃんとユエさんってどこか・・・

その思考は、誰かが使った・・・たぶんフェイトちゃんが使った魔法の気配に氣をとられて、忘れてしまった。

魔法少女リリカルなのは月 10話（後書き）

こんにちは、お久しぶりです。作者です。

今回はフェイトとの会話が多かったですね。

アニメ見てて思ったんですがどうしてフェイトは顔を隠す仮面みたいなものを着けてないんでしょうか？

管理局が来ないと思ったからでしょうか？

ちよっと甘いですね。それが良いんですが・・・

なのはちゃんが雪人Ⅱユエに気づきそうですが気づきません。

さてこれからどうなるんでしょうか？それではまた次回じゃあねー
バイバイ！

50000ヒット記念雑談

作者「PV50000、ユニーク90000ヒット！YA——HA——！」

雪人「うるせーよ！」

作者「君にはわからないのか！？5万だよ！？5万！？つまり君は5万回も人に見られているんだよ！？」

雪人「嫌な言い方だな！おい！」

作者「そんなことよりも今回はちゃんと企画を考えてきたんだ。」

雪人「へへ。そういうのは何もしたがないお前が？」

作者「ふっ。私は楽しければ何だってやってやるさ。」

雪人「・・・まあいいや。早く始めちゃって。」

作者「酷い！・・・じゃあ始めるぞ！」

某機動戦艦のある音楽が流れてくる。

作者「それじゃあ行ってみよう！なぜなに雪人く！」

雪人「イエーイー！って！？それはやっちゃダメだろ！」

作者「そんなことは気にするな！行くぞ！まずは一つ目の質問！」

雪人「質問って。感想も来てないのに何言ってるんだ。」

作者「なにやら外野がうるさいですが関係ありません！第3新東京市お住まいのペンネームエヴァンゲリオン様からのお便りです。」

雪人「本当にこのユーザー名だった人はごめんね。」

作者「高科雪人さんはどうしてATフィールドを使えるんですか？あれは僕たちと使徒しか使えないのに……。との事です」

雪人「本物来ちゃった！？」

作者「さあさあ、答えてください！」

雪人「えーっと。俺の能力は全ての世界の技、魔法、スキルを使えることなんだけど。実は生物限定の能力なんだ」

作者「生物限定の能力？なんですかそれは。」

雪人「つまりロボットとかの技は使えないって事だ。再現することは出来るけど。」

作者「なるほど！しかしエヴァンゲリオンはロボットなのでは？」

雪人「あれは人造人間だろ厳密に言うとなロボットじゃないんじゃないかないか？」

作者「という事です！わかったかな？続いて2つ目の質問です！長野県在住のジョー・オダギリさんからのお便りです。」

雪人「もしかしてオダ○リジョーさん？」

作者「雪人君はどうしてクウガに変身できるんですか？あれはアマダムやベルトがないと変身できないのに。この事ですがどうしてですか？」

雪人「あれはたぶんだけどクウガに変身できるのが生身の人間だからじゃないか？ケータイとかなんかよく解らない機械の昆虫とかで変身するやつには変身できないし・・・」

作者「つまり、変身できるのはクウガがアマダムの入った人間だから。というわけですね？」

雪人「・・・たぶん。」

作者「それでは次の質問です！ペンネーム天の道を往き総てを司る男さんからです！」

雪人「・・・もうつつこまねーぞ。」

作者「なぜあなたはマスクドライダーシステムが無いのにクロック・アップできるのですか？もしかしてワームですか？だとしたら・・・との事です。」

雪人「俺殺られる！？俺はワームじゃないよ！クロック・アップはワームが出来るから出来るだけだよ！？」

作者「なるほど。ワームも生物ですもんね。天の道を往き総てを司る男さん？主人公は殺しちゃダメですよ？これで質問が全て終わり

ました。」

雪人「俺、殺されないよな？」

作者「・・・それではまた次回！」

雪人「おい!？」

作者「これからも異世界冒険譚をよろしくね~~~~~!」

50000ヒット記念雑談（後書き）

と言う訳で祝！50000ヒット！イエーイ！パフパフ！

こんなに見ていただいてありがとうございます！

自分が書いた作品が5万回も見られていると思うと涙が出そうになります。

私の作品を見て楽しんでいただけたら幸いです。

これからよろしく願います！

魔法少女リリカルなのは月 11話

良心がない人間なんて、親が子に対して愛情が1かけらも無いなんて、

そんな人間はいないと俺は願っている、

だから、俺は願っている、プレシアにフェイトへの愛情があることを……

魔法少女リリカルなのは月……はじまります。

??? side

時空管理局

時空航行艦船

『アースラ』

暗い次元の狭間、ここはそこを移動する船のブリッチのようだ。

同じ制服を着た大人たちが、モニターに向かって仕事をしている。

新しく人が入ってくる。女性、緑色の長い髪、そして額に何かの印

のような物がかいてある。

その女性は艦長席に手を乗せ、下にいる職員たちに話しかける。

「みんなどう？ 今回の旅は順調？」

「はい。現在第3船速にて航行中です。目標次元には、今からおよそ160ベクサ後に到達の予定です。」

「前回の小規模次元震以来、目立った動きは無いようですが・・・3組の搜索者が再度衝突する危険性は非常に高いですね。」

「そう。」

その女性は艦長席に座る。この人がこの艦の艦長らしい。

「失礼します。リンディ艦長。」

若い女の子の職員が紅茶を持ってくる。

「ありがとね、エイミィ」

リンディと呼ばれた艦長はそう言い、カップを口に運ぶ。

「そうね。小規模とはいえ次元震の発生は・・・コクツ・・・ちよつと厄介なものね。」

リンディは紅茶を飲みながらそう言った。

「危なくなったら急いで現場に向かって貰わないと。ね？ クロノ。」

そうリンディに言われた少年は、上にいるリンディに向かって

「大丈夫。解ってますよ艦長。・・・僕はそのために居るんですから。」

そう何かのカードを取り出して言った。

side out

??? side

高時空間内

『時の庭園』

くっ！なんてこと！ジュエルシードが1週間でたった4個ですって！？

遅い、遅い遅い遅い遅すぎるわ。私は早くアリシアと一緒に暮らしたいのに。あの人形はまったく使えない。

しかも、お土産ですって！？ふざけるのも大概にしろ！使えないツカエナイ本当に使えない！

私が物にあたっていると、誰も居ないはずの部屋から声が響いてきた。

「おや？どうしたプレシア・テストロッサ？ずいぶんとご機嫌斜めだな。」

「なっ！？」

どこから！？それにここには誰も入れないはず！

そう思い声の主を探していると。

「こちらだよ。」

そうアリシアが入ったポットの後ろからガキが出てきた。

「・・・何なの？・・・このガキ。何処かおかしい。目の前に居るはずなのに、なぜか雷が目の前に居るような。」

「ふむ・・・それにしても。娘の死体を何年かは知らないが保存しているとは、なかなかの執念だ。」

「・・・死体ですって？違うわ。アリシアはもう少しで生き返るもの。だから、アリシアを死体なんて言ったこのガキを殺す。」

「・・・アリシアから・・・離れなさい！」

私は、アリシアに当たらないように、ガキに向かって魔法を放つ。

——ドオン！

当たった・・・煙で見えないけど、私の雷の魔力変換を使った魔法

に当たったのだから、焼け死んでいるでしょう。早速死体の処理を・

「ふーやれやれ、いきなり攻撃してくるとは・・・なかなか過激な歓迎の仕方だな？」

「何ですって!？」

バカな!？確かに直撃した!死んでないなんてありえない!

そう思い私はもう一度子供に魔法を放つ。

バチバチィ!

「無駄だ・・・私に電撃は効かん。」

その子供は私の放った魔法を手で握りつぶす。

そんな・・・でもこれなら!

私は魔力変換していない魔法を準備する・・・

「まあ待ちたまえ。争いに来たわけではない。」

前に目の前の子供が話しかけてきた。

「何ですって?」

「この子はアリシア・テストロッサといったな。」

「・・・・・・・・ええ。」

「あなたの目的はこのアリシア・テストロッサを生き返らせること、
そうだな？」

「なぜその事を・・・・・・・・」

「知っている？と言いたいのかね？理由は噂で聞いた・・・・・・・・という
事にしておいてくれ。」

「・・・・・・・・まあ良いわ。それで？あなたは何をしにここ
へ来たのかしら？」

「大魔導師プレシア・テストロッサと取引に来た、と言うところだ
な。」

「取引？」

「ああ、取引だ。私の提示した条件を飲んでくれれば・・・・・・・・」

そう言って目の前の子供は、いったん言葉をとぎり。次の瞬間信じ
られないことを言った。

「アリシア・テストロッサを生き返らせよう。」

s i d e o u t

F A T E s i d e

海鳴町 市街地

「バルディッシュどう？」

「R e c o v e r y c o m p l e t e .」

「そう。頑張ったね。えらいよ。」

私はバルディッシュをほめた。

「感じるね。あたしにもわかる。」

「うん。もうすぐ発動する子が、近くにいる。」

早くたくさん手に入れて、母さんに喜んでもらわなきゃ。

・・・きた！

ジュエルシードの魔力の発動を感じ取る。

「アルフ、行くよ！」

「OK！フェイト！」

s i d e o u t

yukito side

「……来たな。」

俺はプレシアとの交渉の後、急いで海鳴町に戻ってきて、ジュエルシールド戦の準備をはじめていた。

さて行くか。そうして俺は自分の部屋の窓から飛行魔法を使って飛んで行く。

いた！なのはちゃんが砲撃の準備をしている。俺も滞空しながら、魔法を使う。

その呪文は転生する前にもっとも口に使っていた呪文。

「ラステルマスキルマギステル。ウエニアント・スピーリトアスリアーレス・フルグリエンテース来たれ雷精、風の精。」

俺が詠唱している間になのはちゃんはチャージを済ませたようだ。

「うちぬいて！ディバイン！」

「Buster。」

なのはちゃんの砲撃が木のジュエルシールド暴走体に当たる。

クム・フルグラティオとロット・テンベスター・アウストリーナ
「雷を纏いて吹きすさべ南洋の風。」

うわ・・・地面に沈んでるよ。

なのはちゃんの砲撃が当たると同時に、フェイトも砲撃の準備が終わり、魔法を放つ。

「貫け轟雷！」

「Thunder Smasher。」

フェイトの魔法が放たれ、俺の魔法もちょうど完成する。

「・・・雷の暴風！」
ヨウイス・テンベスター・フルグリエンス

2つの雷は互いに絡み合い、さらに威力を増す。

グヲオオオ・・・

ジュエルシールドの暴走体は、シールドを張って、防御するが1秒と前から破られ、雷をその身に受ける。

グヲオオオオオオオオオオ！

一段と大きな叫び声を上げ、ジュエルシールドの暴走体は消し飛ぶ。

そして後にはジュエルシールドが。

「Sealing mode. Set up.」

「Sealing form. Set up.」

「ジュエルシールド！シリアル7！」

「封印！」

封印すると同時に、辺りが光に包まれる。……今回はジュエルシールドは安全に封印されたようだ。

光が収まり、なのはちゃんとフェイトが同時に相手に杖を向ける。

それを見た俺は、下にいる2匹の近くに降り立つ。

「ユエ！体の方はもう良いのかい？」

「アルフか。ああ。もう大丈夫だ。」

「あの！」

アルフと俺が話しているとユーノが話しかけてきた。

「あなたは、ジュエルシールドを取りに行かないんですか？」

どうやら俺がジュエルシールドを取りに行かないのを疑問に思ったらしい。

「行ってほしいのかね？」

「い、いいえ！そうではなくて。」

「ふ・・・冗談だ。私に取りに行かない理由の1つはあれは2人の戦いだからだ。」

「2人の・・・戦い。」

「それに私に取りに行って乱戦になったら、昨夜のようになるかもしれないからな。」

「そ、そうですね。」

話をしている間になのはちゃんがフェイトに『勝負に勝ったら話を聞いてくれる？』と言う。フェイトは沈黙でそれを了承する。

そして2人は同時に相手に向かって飛び、杖をぶつけ・・・

「ストップだ！」

ようとしたが、それはなのはちゃんとフェイトの間に現れた男子に阻まれた。レイジングハートは左手で、バルデッシュは右手に持った杖で、それぞれ止めている。

出てきたな。ちょっと空気読めない子no. 1のクロノ・ハラオウン君。つか、よく自分よりランクが高い魔導師の戦いに飛び込んで

こられるな。

「ここでの戦闘は危険すぎる！・・・時空管理局、執務官クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせてもらおうか。」

魔法少女リリカルなのは月 11話（後書き）

お久しぶりです。作者です。

今回はプレシアさんと交渉してみました。

そして主人公の雷の暴風炸裂！主人公は英語？で呪文詠唱しています。

だってネギまを読んだときが中2だったんだもん！b y 雪人

との事です。ではまた次回でお会いしましょう。じゃあねーバイバイ

魔法少女リリカルなのは月 12話

やっと出てきたクロノ・ハラウン
いきなりフェイトを攻撃するとはね

とりあえず俺は管理局に敵対することを覚悟でフェイトを守る。

魔法少女リリカルなのは月………はじまります。

y u k i t o s i d e

「ストップだ！」

出てきたか。クロノ・ハラウン。とりあえずフェイトを守るために盾の準備をと。

「まずは2人とも武器を引くんだ。」

クロノがそう言うのと3人とも地面に降りてくる。

「このまま戦闘行為を続けるなら……っ!？」

クロノが何かに気がつき、上を見ると魔力弾がクロノに向かって落ちてくる。

「くう！」

それをクロノはシールドではじいて弾道をそらす。

「フェイト！撤退するよ、離れて！」

アルフは魔力弾を準備しながらフェイトに言う。

アルフの魔力弾が放たれるとともにフェイトがジュエルシードに向かって飛ぶ。

フェイトがジュエルシードを掴む瞬間、たくさんの魔力弾がフェイトに向かって行く。

「瞬動！そして、ATフィールド！」

俺は瞬動を使いフェイトの前に行き、ATフィールドを張る。

ガガガン！

魔力弾がATフィールドに当たるとともに腕に軽くはない衝撃が走る。

「なに！？」

俺は驚いているクロノを

「やれやれ。いきなり当てにくくとはな。」

「あなたは・・・。」

「早く逃げたまえ。」

驚いているフェイトにそう言うと。フェイトはジュエルシードを持

って逃走する。」

「何をするんだ！彼女を逃がすなんて！」

「君こそ、いきなり何をするのかね？それに、何だ？その時空なんてら局と言うのは。」

「時空管理局を知らないだって！？魔法を使っているのに知らないわけないだろう！」

「そのようなことを言われてもな？私はこの世界を出たことがない。」

これは本当だ。入ってきたことはあるけど。

「それなのにその、管理局を知らないとおかしいとは、何様のつもりかね？」

「だから僕は時空管理局 執務官 クロノ・ハラオウンだ！」

「フン！さっきから聞いていれば。管理局、管理局まるで子供だな。貴様の様な子供がいる組織だ。さぞかし下らん組織なのだろうな？」

「管理局をバカにするな！それに僕はもう14だ！」

「ククク……また管理局と言ったな？そんなにヒーローごっこがしたいんだったら家でママとでもやるんだな？ボーヤ。」

「何だと……？」

おお、怒ってる怒ってる。

「君を、犯罪者に加担した容疑で逮捕する！」

「やってみるが良い。」

先に動いたのはクロノだった。

「ステインガーレイ！」

クロノの杖S2Uから魔力弾が放たれる。

「トレースオン。是、干将莫耶。」

俺はそれを干将莫耶で切り、払い、落とす。

「その剣は！？ロストロギアの不法所持だぞ！」

「ロストロギア？分けがわらんな。」

「くっ！ステインガースナイプ！」

「瞬動。」

クロノから高速の魔力弾が飛んでくるが、こちらも高速でかわす。

「そら、これが欲しいのならくれてやる！」

そう言って俺は干将莫耶を左右に放り投げる。

「な!？」

クロノは驚いて動きを止める。

「トレースオン。是、ロトの剣。食らいたまえ!ロトの剣技!」

クロノに瞬動で迫り、逆袈裟、左薙、唐竹の順に剣を放つ。

「何ッ!剣が!?!...うわっ!?!」

クロノはそれをシールドで防御するが1撃2撃と徐々に後ろに押され3撃目でシールドが碎ける、がすぐに後ろに下がってしまった。

「くう...それもロストログアか...さらに罪状追加だ。」

「まだ訳の解らんことを...それよりかわせ、クロノ・ハラオウン。」

「なに？」

「たわけ!かわせと言ったのだ!」

「何ッ!?!」

クロノの左右から干将莫耶が迫る。

クロノは飛んでそれをかわす。

「何だ!?!今のは!?!」

「干将莫耶は夫婦剣。その繋がりには、自らを動かすほどに強い。」

「くっ！」

クロノが苦し紛れのように魔法を放つが、俺はすべて叩き落す。

「ク・・・無駄だ。クロノ・ハラウン。」

「うるさい！ステインガースナイプ！」

「フ・・・瞬動」

また高速の魔法を撃ってきたので俺は瞬動でかわす。

「なにっ!？」

「かかったな！」

瞬動が終わった瞬間、俺はバインドで縛られていた。

「君がステインガースナイプを避けるときに高速移動をしていた。そこを狙わせてもらった。その移動法は、ずいぶんと制御が効かないみたいだからね。」

チィ！瞬動の後の硬直を狙われたか！だがクロノ君、それは負けフラグだ！

「ふむ・・・なかなかやるようだな？だがもっと周りに気を配ったらどうだね？例えば・・・頭上とかかな？」

俺の言葉にクロノは一瞬考えるが、

「何を言うかと思ったら。僕が君から目を離すとも思ったのか？」

「こちらは素直に忠告したのだから？ トレースオン。」

クロノの頭上にバーサーカーの石剣が投影され、そのままクロノに向かって落ちていく。

「っ!？」

クロノも気づきシールドを張りながら後ろに避ける。

「いったいどこから!? 転移魔法か!？」

「言うと思うかね? そら、トレースオン。天の鎖よ!」

天の鎖でクロノの足に引っ掛け転ばせる。

「トレースオン。」

その言葉とともに降る剣や槍。クロノを地面に縫いつけ動けないようにする。

「終わりだ・・・」

「くっ!」

「おっと無理に外さないほうがいい。」

「なんだと？」

俺は剣を一振り投影してそれを宙に投げる。

「ブローケン・ファンタズム。」

ボン！

小さいが人を殺すには十分な爆発が生まれる。

「く……。」

それを見たクロノは不利だと解り抵抗をしなくなった。

「さて」

クロノに近づいていき、剣をクロノにつきつける。

「どこの組織のものだ？何の目的でここにいる。」

聞きながら、ヤクザさんとかの尋問みたいだなと思ったが考えてみると同じことをしているのでちょっと落ち込んだ。

「だからさっきから言っているだろう！僕は時空管理局、執務官、クロノ・ハラオウンだ！」

それを聞くと俺はあからさまにため息をつく。

「ふう。まったくそんな組織は日本には無いと言うに。まあいい身体に聞くとしよう。」

「なっ!？」

「ユエさん!？なにを!？」

武器をゆっくり振り上げる。

「まずは一太刀目、いつまで耐えられるかな？」

そう言って俺は武器を振り下ろ・・・

「待ってください。」

す前に、ストップがかかった。

「ほう・・・これは。」

「私は時空管理局 アースラ艦長 リンディ・ハラオウンと言います。」

「時空管理局か・・・空中に画面が出てくるとはな。」

「信じて頂けますか？」

「・・・ああ、信じよう。」

地球の技術じゃ空中に画面なんて出せないしね。

「それでは、事情を聞きたいので3人ともこちらに来てもらえますか？」

「断る。いきなり攻撃してくる組織の船に乗れと?」

「それは……」

「話がしたいのなら……明日の3時にここに来い。」

「わかりました。」

「艦長!」

「クロノ、今回はあなたの不用意な行動でこうなったのよ?」

「う……。」

なにやらクロノがリンディに叱られているが無視してなのはちゃんに話しかける。

「高町なのは。」

「は、はい!」

「君もそれでいいな。明日の3時にここだ。」

「ハイ……」

「そんなに怖がらなくてもいい。いいか一人であいつらについて行くな。」

「どうしてですか?」

「相手が何を考えているか分からんからだ。ついでに言えば味方かどうか……な。」

「はい。」

「では、わたしは行こう。」

「ちょっと待て！」

俺が帰ろうとすると地面に縫い付けられたままのクロノが話しかけてきた。

「どうしたのだ？クロノ・ハラオウン。そんな虫の標本みたいな姿で。」

「君がやったんだろう！帰るならこれを外してから……」

「外した途端に襲ってくるかもしれないから私が帰るまでそうしていたまえ。」

「なっ!？」

「ではな。」

瞬間移動を使い魔力のリミッターをかけながら俺は帰る。地面に貼り付けにされているクロノをそのままにして。

結局開放したのは30分後でした。カッとなってやった。クロノがよかった。反省も後悔もしてない。

魔法少女リリカルなのは月 12話（後書き）

お久しぶりです。

クロノと戦闘させてみました。

フェイト逃がす↓クロノ怒る↓オリ主挑発する↓クロノマジ切れ。
は鉄板だと思う。

次回はリンディさんと交渉します。

それではまた次回。

魔法少女リリカルなのは月 13話

クロノ・ハラウンとの戦闘の次の日リンディさんとの交渉が始まる。

少しでもなのはちゃんに有利に交渉しないと

魔法少女リリカルなのは月………はじまります。

A s u r a s i d e

薄暗い艦の中エイミィとクロノは先のなのはとフェイトの戦闘を見ていた。

「すごいや。どっちもA A A級の魔導師だよ。」

「……………ああ。」

あまり元気がないクロノ。どうやら先の失態でリンディにコッテリ絞られた様だ。

「こっちの白い服の子はクロノ君の好みっばいかわいい子だし。」

「……………エイミィ。そんなことは……………どうでもいいんだよ。」

「魔力の平均値を見てもこの子で127万。黒い服の子で143万。最大発揮時はさらにその3倍以上!」

「魔法は魔力値の大きさだけじゃない！状況に合わせた応用力と的確に使用できる判断力だろう！」

自身のちよつとしたコンプレックスを言われたためか突然元気になり反論する。

「じゃあ、クロノ君の言葉を再現してるよね？この子。」

そう言つてエイミィはモニターに白い長髪の男の子を映す。

「魔力値はクロノ君よりもさらに低いAランクくらい。それでも一般魔導師と比べるとすごいけど。」

「……………たしかにコイツの魔力は僕より少ない。だが何だ？コイツの魔法はどこか変だ。転移魔法にしても魔法陣が現れない。何故なんだ？」

「さあね〜？」

クロノとエイミィがユエについて話しているとリンデイが部屋に入ってきた。

「か……艦長……」

ビビッてるビビってる。

「ん？……ああ〜彼女たちのデータね？」

「…………ハイ」

「……確かにすごい子達ね？」

「彼女たちの魔力がロストロギアに注ぎ込まれれば次元震が起きたのもうなずける。」

「そうね。」

「あ！そういえばクロノ君。そろそろ時間じゃない？」

「ん？……そうだな。それじゃあ、向こうに行きましょう艦長。」

side out

yukito side

「じゃあユキくん！わたしもう帰るね？」

「あ！なのはちゃん！」

そう言っている間に、なのはちゃんはもう見えなくなってしまった。公園に行くのかな？

「どうしたんだろうね？なのはちゃん。雪人君置いて帰っちゃうなんて初めてじゃないかな？」

「知らないわよ！」

「わかんない。……まあいいか。俺も帰るとするよ。」

「うん。じゃあね、雪人君」

「ふん！ 気をつけて帰りなさいよ！」

はいはい、ツンデレツンデレ。

無論そんなことは内心にとどめる。心の中では何を思っても自由ですから。ベ・・・別にアリサが怖いわけじゃないんだからね！

・・・自分で思ってた気持ち悪くなってきた。

「ああ、また明日。」

魔力リミッターを外して、持っている鞆を影で作ったゲートに入れて家に飛ばす。結構魔力使うからあんまりやりたくないんだけど・・・。

仮面をつけ髪を伸ばしユエの服を出す。

準備が終わり公園に向かう。

公園に着くと、なのはちゃんが先にいて公園のイスに座って待っていたようだ。

「ム・・・すまない待たせたようだな？」

「あ！ ユエさん！ 私も今来たところです。」

まるで待ち合わせをした恋人同士ののような会話をしているな。これが本当に恋人同士の会話だったら（泣）。

俺はなのはちゃんの横に座りあらかじめ買ってきていたコーラの缶を空けて中身を飲む。炭酸飲料のシュワシュワとした爽快感と甘さがのどを潤す。

「……コーラ好きなんですか？」

どうやら顔、というか雰囲気が出ていたらしい。なのはちゃんはそう俺に聞いてきた。

「ああ。好きだ。……体はコーラで出来ていると行っても良いほどにな。」

「ふふっ……わたしの友達にもそういう人がいるんです。コーラが大好きらしくて……あ！そういうえば髪もユエさんと同じ銀色みたいな色なんですよ！」

「ふ……そうか。そいつとはいい友になれそうだ。」

十中八九、俺の事だろうな。

少しなのはちゃんと話していると魔方陣が現れる。
どうやらリンディさんたちが来たようだ。

「ふむ……2時55分。では話し合いをはじめよう。」

来たのはリンディエイミイそしてクロノだ。もちろん杖はおろかバリアジャケットすら着ていない。

リンディさん達を机を挟んで向かいに座らせて、なのはちゃん達は自分達がなぜジュエルシードを集めているのかを説明した。

「なるほど、そうですか。あのロストログア、ジュエルシードを発掘したのはあなただったんですね？」

「はい。それで僕が回収しようと・・・」

「立派だわ・・・」

「だが同時に無謀でもある！」

クロノの言葉にユーノはかなり凹んだようだ。・・・俺？そこまで言う事はないんじゃないかと思って口を挟もうとしたがちよつと怖かったのでやめた。俺は一小市民なのである。14歳にびびる（精神年齢は）20過ぎの大人って・・・orz

「あの・・・ロストログアってなんですか？」

「ああ！異質世界の遺産・・・と言っても解らないわね？えつと・・・」

めんどくさ・・・じゃなかった。話が長いので右から左へ流します。

「しかるべき手続きをもって、しかるべき場所に保管されていなければならぬ品物。」

保管、ではなくて壊せばいい。とか思った俺はダメだろう。何せ、どうやったら発動するかもわからない代物なんだから。

「君の持っている武器もそのロストログアだ。」

「干将莫耶やロトの剣のことかね？」

「そうだ。」

「ふん。残念ながらあれは貰い物であり、私の所有物だ。彼らの想いが籠っている物をおいそれと渡すわけにはいかん。」

「なに！」

「待ちなさいクロノ。今は説明の最中よ。」

それにあんな剣の1本や2本で世界が崩壊していたら、衛宮士郎はそんな力なんて振るわねーよ。……たぶん。

そんな会話を交えながらロストロギアの説明は続く。

「聞いたことがあります。旧暦の462年次元断層が起こったときの事を。」

「ああ。あれは酷いものだった。」

「隣接する平行世界がいくつも崩壊した、歴史に残る悲劇。」

あれ？アニメでこんなこと言ってたっけな？やばい、あんまし覚えてなかったからな。

「繰り返しちゃいけないわ。」

そう言ってリンディさんはエイミィが出していたお茶に……。日

本茶だよ？紅茶じゃないよ？・・・砂糖を入れた。

「あっ・・・」

なのはちゃんも相当驚いている。普通緑茶って和菓子の甘さと緑茶の渋さが合わさるのが美味しいんであってお茶を甘くしたら・・・まあ俺に被害が無いならいいか。リンディさんの出すお茶には手を出さないようにしよう。

「これよりロストログア、ジュエルシードの回収については時空管理局が全権を持ちます。」

「君たちは今回のことは忘れてそれぞれの世界に返って、元通りに暮らすといい。」

「でも・・・そんな。」

「次元干渉にかかわる事件だ。民間人に介入してもらうレベルの話じゃない。」

「でも・・・」

「まあ急に言われても気持ちの整理もつかないでしょう。今夜一晩3人でゆっくり話し合って、それから改めてお話をしましょう?」

なのはちゃん達はいきなりの事に戸惑っているいるようだ。

俺は立ち上がり

「1日もいらん。私は今から手を引かせてもらう。」

そう言って帰ろうとしたとき、

「待って！」

そうリンディさんから呼び止められた。

「何かね？」

「あなたにはまだ聞きたいことがあ「断る。」っ!？」

「どうせ私の武器や魔法について聞きたかったのだろう？」

「ええ・・・そうです。」

「ふん！威嚇射撃を当てようとして、さらに口論で負けただけで撃つてくるような組織とはお付き合いになりたくないのですね。」

「うぐっ！」

「それについては謝ります。ですから・・・」

「それに・・・そこまでして子供に戦わせようとする組織など信用ならん。」

「なっ!？」

「えっ!？」

「なんだって!？」

上からリンディさん、なのはちゃん、クロノの順だ。

「解らないとも思ったのか？確か・・・クロノと言ったな？」

「あ・・・ああ。」

「先ほどリンディ・ハラオウンは『この件は管理局が全権を持つ』と言ったな？」

「ああ。」

「ならばなぜ1日話し合う必要がある？そもそも何を話す？・・・話すことといったら事件やフェイト・テストロッサのことしかないだろう。」

「あ・・・。」

「責任感のある高町なのはのことだ。そう言っておけば、進んで協力と言う形で参加しただろう。もしかしたら私も進んで協力するかもしれないと思ったのだろう？」

「・・・。。。」

リンディさんは答えない。いや、答えられない。

「そんな組織には協力したくないのでね。私はこれで失礼する。」

「・・・待ってください!」

・・・かかった！

今の俺は某新世界の神と同じくらいの顔をしているに違いない。

「あなたの言うとおり、なのはさんやあなたをそのように誘導しようとしました。ですが私たちには戦力が少ないのです。今回の事件、相手がどれだけの戦力かも解らない。その事であまり隊員達を多く使えないんです。ですから・・・私たちに協力してくださいお願いします。」

そう言ってリンディさんは頭を下げてきた。

「母さ・・・艦長!？」

クロノも驚いている。俺も驚いたが。

「ふむ・・・それは管理局からの協力の要請と言うかとかね？」

「・・・はい。」

そうリンディさんから言われたとき俺は独り言をつぶやき始めた。

「ふむ・・・管理局はどのくらいの規模か知らないが、もちろん協力要請なのだから給金が出るのだろうか？さらに大怪我したときには医療費が下りるのは当然だし、命を犠牲に特攻・・・なんて指示が出されても困るからある程度は命令に異議を唱えることも出来るんだろうな？」

「・・・・・・ハイ。」

リンディさん表情に出していないけど、すごく嫌そうにその条件を飲んだ。

「よかったではないか高町なのは。」

「ふえ!？」

置いてかれていたなのはちゃんに、声をかける。

「こんな破格の条件を管理局は飲んでくれるそうだ。これからがんばりたまえ。」

「え? ええっ? ふえええ!？」

なのはちゃんが混乱している間に帰ろうとしたが・・・

「待て! その言い方だと君が協力しないみたいな言い方じゃないか!」

クロノが止めてきた。

「何を言っているのかね? 私は協力する、などとは一言も言っていないのだが?」

「な!??・・・しかしさっき!」

「私は協力をしてくれと言うんだったらこれ位の条件は当然だな? と言ったのだ。条件を飲んだら協力する、などとは一言もいない。」

「なんだと!？」

「クク……ではさらばだ。」

俺は瞬間移動でその場を後にする。

side out

nanoha side

「クク……ではさらばだ。」

ユエさんは人差し指と中指を額にあててなにかを考える様な表情（仮面で見えないけど）をすると、いきなり消えていなくなってしまった。

「何ッ!？……エイミィ! 追跡は!？」

「……ううん。無理みたい。魔力反応も無いんじゃない。追えに追えないよ。」

「魔力反応がない?じゃあ奴はどうやって転移を……ああもう! 頭がどうにかなりそうだ!」

「落ち着きなさい、クロノ。なのはさん。ちょっとハプニングがあったけど今日は帰って明日……」

「いえ……わたし、管理局に協力します!」

わたしはさつきユエさんが言ったことを思い出していた。がんばれ
って言うてくれた、わたしのためにリンディさんと交渉までしてく
れた、それを無駄にしたくない！

「お願いします！わたしを今回の事件に協力させてください！」

魔法少女リリカルなのは月 13話（後書き）

今回はリンディさんとの交渉シーンです。

雪人君は管理局を嫌っているわけではないので、子供を戦わせる事に少し怒ってます。

アンチ小説とかを見てリリカルなのはのアニメを見ると「そう言う見かたも出来るな。」と感心したりしました。

アニメより待遇が良くなったのかは分かりませんがなのはちゃんはすぐに行動を始めるようです。

これからどうなるんでしょうかね？それではまた次回に会いましょう。

魔法少女リリカルなのは月 14話

なのはちゃんがアースラへ行き学校を休み始めて10日目
もともとの運命を大きく違えて

物語は進み続ける

……願わくば、彼女たちが幸せになれる終わりを……。

魔法少女リリカルなのは月……はじまります。

A s u r a s i d e

「まったく！なんなんだ！あいつは！」

「ユエ君のこと？本当に何なんだろうね？」

「そうね。私が交渉であそこまでやり込められるなんて。久しぶりのことだわ。」

「あいつはそもそも何がしたいんだ？これまでであいつのことが何一つ解らない。」

「……カンショウバクヤとロトの剣……」

「え！？」

「彼の持っているロストロギアよ。あなたが彼のロストロギアの事を言ったときに名前を言っていたわ。」

「そういえば！」

「この情報を調べれば、彼に対策が取れるかもしれないわね。」

「エイミィ！」

「分かってるよクロノ君！出てきた！」

スクリーンに情報が出される。

「まずは干将莫耶だね。昔、この世界に干将さんって刀鍛冶が居たらしくて、その干将さんが王様に頼まれて刀を打つ事になったの。でも作ったのは良いんだけどうまく出来なかったんだって。干将さんが行き詰っているとき莫耶さん・・・干将さんの奥さんが来て『類い希なる名刀を作るためには神の助力が不可欠でしょう。神の加護を得るには神への貢ぎ物が必要です。必ず名剣を完成させてください』って言って炉の中に飛び込んだんだって、そして莫耶さんの命を代償にして作られたのが、干将莫耶。」

「...悲しい物語ね。」

「...ええ。それで、ロトの剣ってやつは？」

「.....ぐすつ。今調べてみるよ.....あれ？」

「わかったのか？」

「うん.....でも.....」

「なんなんだ。早く言ってくれ。」

「ゲームの…架空上の剣みたいだよ?」

「……はあ!?!」

アースラの中クロノの驚いた声が艦内にいる職員全員に聞こえたらしい。

side out

FATE side

私が管理局の魔導師から逃げてきてマンションに着いたとき、ちょうど誰かから、通信が来た。

「……フェイト。」

「か……あさん。どうして?」

「……私が娘であるあなたに話するのに理由なんているのかしら?それとも、私と話すのは嫌なのかしら?」

「い、いいえ!そんな事ないよ、母さん!」

「……まあ、いいわ。それでジュエルシードは今、いくつ集まっているの?」

「……あ……5個です……。」

「・・・・・・・・そう・・・・わかったわ。」

「え!？」

「それで? 他に変わったことは？」

「は、はい! えっと、管理局がこの世界に・・・・」

「見つかったの？」

「・・・・・・・・はい。」

「まあいいわ。フェイト、そのまま搜索を続けなさい。」

「はい。」

「・・・・・・・・フェイト。」

「？」

「そ・・・・・・・・その、・・・・・・・・気を付けなさい・・・・・・・・ね?」

「え・・・・・・・・?」

「言いたかったのはそれだけよ。」

そう言って母さんは通信をきった。

side out

p r e r n a s i d e

「ふう。まったくあの子も難しい条件を出すわね。」

あの日・・・あの不思議な少年ユエがアリシアを生き返らせる代価として出てきた条件は2つ。1つ目は全てのジュエルシードが封印されたとき、手持ちのジュエルシードを全てユエに渡すこと。そして2つ目は・・・

「まさか私がフェイトに親として接すること・・・なんてね。」

そう。それこそがユエが提示した条件、それを破れば私とアリシアを殺す・・・なんて言われたらやるしかないじゃない。

「それに、ユエが使ったあの魔法・・・」

ユエが小鳥の死体を使って見せた魔法、あの魔法があればアリシアが生き返る。

「まったくいい加減なものねわたしも。余裕が出来た途端にあの笑顔が・・・愛おしく思えるんだから。」

今までの笑顔向けられて私は何故、苛立ったんだろう。

思い出すのはあの子に行ってきた数々の仕打ち・・・。

「私は、どうすればいいの・・・。」

s i d e o u t

y u k i t o s i d e

「そう言う訳で、高町さんは家庭の事情でしばらく学校をお休みするそうです。でも、病気や怪我や不幸なことがあってお休みするわけじゃ無いと言う事ですから心配しなくても大丈夫ですよ。」

昨日の夜なのはちゃんから電話で、しばらく学校に来られないことを伝えてきた。

ちょっと原作とは違うけどおおむね同じように進行している。

「……高町さんがお休みの間、ノートとプリントは……」

「はい！私が！」

アリサ、すずか、俺の3人で話し合った結果ノートを書くのはアリサに決まった。まあ、なんちゃって天才の俺より本物のほうが良いだろうしね。

「アリサさん。それじゃあよろしくね？」

「はい！」

……さて、フェイトが無茶するのは何日後だっけ？

s i d e o u t

F A T E s i d e

「見つけた。残りのジュエルシード。海の中にあっただ。」

「どうするんだい？フェイト。」

「残りのジュエルシードを全て封印する。」

「1度にかい！？フェイト！そんなの無理だよ！」

「でも、母さんが必要だって言ったから。私はやるよ。」

「この前のことかい？……あのいきなりフェイトを心配しだしたりして。」

母さんが、私のことを心配してくれた。もう少しでジュエルシードが集まるから、母さんにも余裕が出来てきたんだと思う。

ジュエルシードを集めて、取り戻すんだ！あの時の母さんの笑顔を！

「行くよ、アルフ。準備して。」

「……わかったよ。フェイト。」

「アルカス・クルタス・エイギアス・煌めきたる天神よ。今、導きのもと降り来たれ。バルエル・ザルエル・ブラウゼル。」

私の呪文に呼応して雷が降り始める。

「撃つは雷、響くは豪雷、アルカス・クルタス・エイギアス。……はあっ！！！」

呪文が放たれ、雷が海へと降り注ぐ。

1瞬の後、ジュエルシールドの魔力が現れる。

その数……6！

「アルフ！空間結界と、サポートお願い。」

「ああ！任せておいて！」

「行くよ。バルディッシュ。」

母さんの笑顔を取り戻すために！

side out

nanoha side

「はあっ…はあっ…！」

アースラの中をわたしは走る。

さっきの警報、たぶんジュエルシールドが発動したんだ。何故だか知らないけれどそこにフェイトちゃんがいる気がする！

「フェイトちゃん！」

わたしは司令室に走りこみながら彼女の名前を呼ぶ。

画面に出ていたのは紛れもないフェイトちゃんだった。

「あの！わたし、急いで現場に！」

「その必要はないよ。放っておけば、あの子は自滅する。」

「え？」

今、なんて？

「仮に自滅しなかったとしても、力を使い果たしたところで叩けばいい。」

「でも！」

「今のうちに捕獲の準備を。」

「了解！」

「私達は常に最善の選択をしなければならないわ。残酷だけどこれが現実。」

そんな……私はどうすればいいの？

（行って！）

この念話はユーノくん！？

（なのは。行って。僕がゲートを開くから行ってあの子を。）

（でもユーノくん！わたしがあの子とフェイトちゃんと話がしたいのはユーノくんとは。）

（関係ないかもしれない。だけど僕は、なのはが困っているなら力

になりたい。なのはが僕にそうしてくれたように。あの人もそう思ってるんじゃないかな？)

あの人……ユエさん！

ゲートが光ってフェイトちゃんへの道が開く！

「君は！」

わたしは走ってゲートに向かう。

(ユーノくん！ありがとう！)

(どういたしまして。なのは。)

ユーノくんとすれ違うとき念話ではないけどそう会話したような気がした。

「ごめんなさい！高町なのは。指示に逆らえる権利を使って、勝手な行動をとります！」

「あの子の結界内へ転送！」

ユーノくんの言葉とともにわたしはフェイトちゃんのもとへ。

s i d e
o u t

F A T E
s i d e

どうしよう……アルフも捕まっちゃたし、私の魔力も……うん。泣き言を言ってちゃダメだ。

「くう……はあっ！」

ジュエルシードの稲妻を切り、避ける。きりがない！

「フェイト！後ろ！」

「え？」

アルフの言葉に従って後ろを向いた時。そこにはもう竜巻が！

避けられない。母さん、ごめんなさい。ジュエルシード集められなかった。

もう逃げられないそう思った。私は目を瞑り、数瞬後に来る衝撃に、耐えようとする。

「……あれ？」

おかしい……まだ衝撃が来ない。

「大丈夫か？フェイト・テストロッサ。」

今だ眼を瞑っている私にそう声がかかった。

side out

y u k i t o s i d e

「やれやれ。まったく、彼女は無茶をするのが好きらしい。」

どうも雪人です。

目の前……と言っても1キロほど先ですが、フェイトちゃんが居ます。

アルフは雷に捕まって動けず、フェイトちゃんもそろそろヤバめ？

「では、私も介入するとするか。……トレース・オン」

顕現するは機械的な青い翼そして大きな銃が2つ。ガンダムSEE Dのフリーダム装備だ。銃が2つなのはオマケ。

「スキル……コーディネイター！」

スキルの発動とともに、たくさんの情報が整理され、フェイトを救うにはどうすれば良いかがわかる。

本物のフリーダムみたいにマルチロックオンとかは出来ないけど、そこは妄想力でカバーする。

「食らえ、ハイマツト・フルバースト！」

その言葉とともに銃口に魔力がチャージされる。
張りぼての翼と武器だが、そこから放たれるのはこの世界最強、と
言うべき魔法。

「当たれえええ！ダイバイン・バスター！」

6つのディバイン・バスター（小）そのすべてが竜巻と雷に当たり、一時的にジュエルシードの活動をとめる。

「瞬間移動！」

俺は瞬間移動でフェイトの近くまで移動し、まだ眼を瞑っている彼女にこう言った。

「大丈夫か？ フェイト・テストロッサ。」

眼を開けたフェイトは、俺を見て

「っ！？ あなたは……ジュエルシードは渡しません！」

そう言って切りかかって来た！

「うおっ！……ゴホン。いきなり何をするのかね？ フェイト・テストロッサ。」

「……………」

「だんまりか。落ち着け。私は君を助けに来たのであってジュエルシードを手に入れようと思ってきたのではない。」

「そんなの信用できません。」

「ふう……。まったく君は。…む？」

空の上から魔力の気配が、たぶんなのはちゃんだ。

「フェイトちゃん！」

「あんたは……フェイトの邪魔をするな！」

アルフがなのはちゃんに向かって飛んでいく。しかし、それはユーノによって防がれる。

「待て！アルフ！」

「ユエ！あんたもフェイトの邪魔するなら……。」

ちいっ！プレシアさん。確かにフェイトに優しくしてくれて言ったけど、何したらこんな状況作れるの？

「落ち着けアルフ。まずはこの状況を何とかするのが目的だ。」

「なら！わたしが！」

「いらん！私がジュエルシードを抑える。君たちはそれを最小限の力で封印しろ！」

「でも！」

「行くぞ！」

なのはちゃんの制止を振り切り俺は呪文を唱え始める。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック。」

唱える呪文は、闇の福音、ダーク・エヴァンジェルと恐れられた誇り高い悪の呪文。

「契約に従い 我に従え 氷の女王。来れ とこしえのやみ えい
えんのひょうが！」

魔力の奔流とともにジュエルシードを周りの竜巻や海水などともに凍らせる。

「全ての命ある者に等しき死を。其は、安らぎ也。『おわるせかい』
ふっ……砕けろ。」

俺はエヴァンジェリンの魔法を発動して、それを見たことに興奮してこんなことを口走っちゃたんだ。

「あっはっはっはっ！バカめ！ジュエルシードかなにか知らんが、
私の敵ではないわ！」

「あ……あなたは……いったい？」

「我が名はユエ。最強最悪の……悪の魔法使いさ。」

「ふえええっ！？ユエさん、悪い人だったんですか！？」

やべっ。ついテンションが上がっちゃってこのセリフを言っちゃった（汗）。

「ごほん！昔師匠にこの魔法を見せてもらった時に同じ事を言っていたのでな？つい私も言ってしまった……というわけだ。」

「ほええええ。」

……なのはちゃん？そのセリフは他の……それもちゃんとした魔法少女の言葉だから盗らないように。

「呆けていないで、さっさと封印しろ。」

「あ！は、はい！」

フェイトとなのはちゃんはすぐさま全てのジュエルシールドを封印した。

「フェイトちゃん……友達になりたいんだ。」

うむ！良いシーンだ。まさかこの眼で拝めるときが来るとは………えっ！？

次元干渉型の魔法攻撃！？まさかプレシアが！？バカな！？

幸いなのはちゃんとフェイトとの距離は近い。間に合え！

「対魔防御壁展開！」

俺となのはちゃん、フェイトの目の前に魔力を防ぐ壁が展開されプレシアの魔力を阻む。

やばいついこつちを展開しちゃったけど……さっきの『こおるせかい』のせいで魔力量がもう……その証拠に壁が破られる！？

「使いたくはないんだけど……どろあそび、発動！」

俺が技を発動すると空中から泥が現れ俺の身体に満遍なくかかる。
うえ……気持ち悪い。

ポケモンの技のどろあそびは電気タイプの攻撃を半分にする効果がある。これで何とかしてくれよ？

壁が砕け雷の奔流が襲い掛かってくる。

「ぎい！？があああつあああああ！」

痛い！熱い！イタイ痛いイタイいたいアツイイタイイタイイタイ熱
いたいアツイあついイタイ！

内臓が、脳が、眼球が、細胞の一つ一つまでもが焼ききれそうになる。

雷が過ぎ去ったと同時に俺は、海へと落ちて……………

side out

nanoha side

「ユエさん！」

どうしよう！ユエさんが…………あのすごく強いユエさんが……
落ちていく…………助けなきゃ！

そう思った瞬間、わたしはユエさんに向かって飛び出していった。

s i d e o u t

F A T E s i d e

母…さん? どう…して?

「うああああ!」

「! アルフ!」

母さん! どうして!?

「時空管理局、執務官クロノ・ハラオウンだ! 今すぐ、武装を解除してこちらに投降しろ!」

まずい、この前の子が来ちゃった! アルフを連れて転移を……っ!?

「バインド!?!」

「…すまないが、逃げようとしたため捕まえさせてもらった。……くっ! ジュエルシードが全部ない!…ふう。君の使い魔の治療も早く行わなければならぬだろう? それにその魔力量じゃ逃げられないことも解っているだろ?」

私に捕まる以外の選択肢はなかった。

魔法少女リリカルなのは月 14話（後書き）

夏休みだ！

いきなりですみません。ようやく夏休みですよ。

ですがやる事が多くて大変です。

自動車の免許を取らなきゃいけないし。
宿題は多いし。

めんどくさいですね。

まあ夏休みは大概暇になって暇を持て余すだけで休んだ気になりませんけどね。

皆さんはいかがお過ごしでしょうかたぶんまだ1学期などでしょう。もしかしたら社会人の方もいるかもしれません。

お氣をつけてお過ごしください。

それではまた次回。感想があればどんどん投降しちゃってください！
じゃあねーバイバイ！

魔法少女リリカルなのは月 15話

俺はプレシア・テストロッサの魔法によって倒れた
何がプレシアをそうさせたのかは分からない。

俺の魔法より、アルハザードの方が良いと思ったのか？
なぜ？

やっぱり人生はままならないものだ……

魔法少女リリカルなのは月……はじまります。

n a n o h a s i d e

「ユエさん！ユエさんしっかり！」

ユエさんが担架で運ばれていく、あんなに強かったユエさんが……

「大丈夫です！助かりますから！」

アースラの船医さんが大丈夫って言うけどそれでも心配なの！

そうしている間に、ユエさんと船医さんは治療室に入ってしまった。

「なのは……。」

「……ユーノくん。」

「来て。リンディさん達と呼んでる。」

「……………うん。」

司令室に呼ばれたわたしが目にしたものは

「フェイトちゃん。」

「……………」

手錠をかけられているフェイトちゃんの姿でした。

「来たか。」

「クロノ君。」

「……さっきの魔法で今回の首謀者の名前が解った。…エイミィ。」

「了解、クロノ君。」

「プレシア・テストロッサ。名前からするとたぶんフェイトちゃんのお母さんだね。」

「そんな！どうしてそんなことを！？フェイトちゃんのお母さんなのに！」

「フフフフ……………どうしてかしらね？」

その時、司令室のモニターに通信が入り妙齢の女性が映った。

「なにッ！？」

「あなたは！！」

「かあ……さん」

この人が、フェイトちゃんのお母さん……

side out

yukito side

「つう……。ここは…」

目覚めた場所はどこか近未来的な部屋だった。

「アースラ……か？　そういえば俺、プレシアの魔法にやられたんだ
っけ……プレシアはどうして……」

状況からすると医務室とかそんな部屋だろう。薬品や消毒液のにお
いが鼻をつく。

いつまでもここに居てもしょうがない、なのはちゃんのところに……
えっ!?

「バインド!？」

起き上がろうとすると、体がベッドに縛り付けられている。ご丁寧に、首、肩、胴体、足を縛った上に両手を縛っている。……なんか
むかつくな。正体不明な人間を置いておくんだから仕方ない(?)
こととはいええ。

「まあ、こんなんで俺を縛り付けておくなんて無理だけど……スキ

ル、魔力無効化。」

ネギまに出てくる明日菜の能力でバインドを無効化する。

「よし。じゃあ、なのはちゃんのところへ……つう!？」

動こうとすると、体中に痛みが走る。よく見ると、体のあちこちに火傷があった。

「つう……。プレシアにやられたときの傷か……」

とりあえず、回復魔法でやけどを治してなのはちゃんのもとへ。

なのはちゃんの魔力をたどって俺は司令室だと思われる部屋に入る。

ウィーン

と音がして扉が開く。そこには……

「もうだめね時間がないわ……たった6個のロストロギアではアルハザードにたどり着けるかどうかは分からないけど。」

「プレ：シア？」

俺と契約して、フェイトを娘として扱うと約束したプレシアがモニターに映っていた。

「でも……もういいわ。終わりにする。この子を亡くしてから暗鬱な時間も、この子の身代わりの人形を娘扱いするのも」

プレシアがあ言葉の言葉を言ってしまう。

「聞いている？あなたの事よフェイト。せっかくアリシアの記憶をあげたのに、そっくりなのは見た目だけ、役立たずで使えない私のお人形。」

「や…めろ…」

「あなたは私が研究していた死者蘇生の研究…プロジェクトフェイトの失敗作…その名前もプロジェクト名からとった…」

ダメだ…プレシア…それ以上言うな…

「アリシアはもっと優しく笑ってくれたわ…アリシアは時々わがままも言ったけど私の言うことをとてもよく聴いてくれた。」

「やめて…」

「フェイト、やっぱりあなたはアリシアの偽者よ。せっかくあげたアリシアの記憶もあなたじゃダメだった。」

「やめて…やめてよ！」

「アリシアを蘇らせるまでの間に私が慰みに使うだけのお人形。だからあなたはもういらないわ…どこへなりとも消えなさい！」

「お願い！もうやめて！」

「あはははははっ！……………ふふ。良い事を教えてあげるわフェイト。」

イト…あなたを作り出してからずっとね？…私はあなたが……」

（やめろー！プレシア！やめてくれ！）

俺は思わず念話で彼女に語りかけるが

「っ！……大嫌いだったのよ！」

彼女は少し眉をひそめただけで言ってしまった……フェイトを壊す言葉を。

「あ！……。」

フェイトはその言葉を聞くとともに崩れ落ちる。

「フェイトちゃん！」

「フェイト！」

「な！？君は！いったいどうやって！？」

なにやらクロノが何かを言ってきているがそんなことはどうだっていい。

「大変大変！ちょっと見てください！屋敷内に魔力反応…多数！」

「なんだってえ！」

クロノにつられモニターを見ると正式名称は知らないが鎧が地面からまさに湧いて出てくるという表現がぴったりの登場をしてく

る。

「プレシア・テストロッサ、いったい何をするつもり!?」

プレシアは玉座の間にアリシアが入ったポットを魔法で運びながら言う。

「私たちの旅を、邪魔されたくないのよ。……私達は旅立つの!忘れられた都…アルハザードへ!」

「まさか!」

「この力で旅立って取り戻すのよ……全てを!」

プレシアの言葉とともにジュエルシールドが展開し強力な魔力を発する。

「次元震です!」

「振動防御! ディストーションフィールドを!」

「ジュエルシールド6個発動! 次元震まだ強くなります!」

「転送可能距離を維持したまま、影響の薄い空域に移動を!」

「りよ、了解です!」

「アル…ハザード?」

「馬鹿なことを!」

「クロノ君!？」

「僕が止めてくる……ゲート開いて!」

クロノがそう言ってプレシアのもとへ行ってしまう。俺も行きたいところだが、フェイトをこのままにしておけない。

「高町なのは!」

「ユエさん!？怪我はもういいんですか!？」

「そんなことはどうでもいい!急いでフェイト・テストロッサを医務室へ!」

「は、はい!」

俺たちはフェイトを抱えて走り出す。すると

「クロノ君どこへ?」

なぜか先に走り出していったクロノと会った。

「現地へ向かう…現況を叩かないと。」

「わたしも行く!」

「僕も!」

「……わかった。」

「う、うん。」

俺も行こうとしたが、

「ユエさんはまだ無理しちゃダメです。フェイトちゃんと一緒に医務室に行ってきてください。」

「……ああ。」

なのはちゃんに止められた。正直かなり納得いかないが。

「行こう！」

「「うん！」」

俺もフェイトを連れて行くとするか。

医療室のベットにフェイトを寝かせる。

モニターを見るとなのはちゃん達がプレシアの出した鎧と戦っている。俺もそろそろ行かなければ。

「その前に、フェイト。」

俺はフェイトに話しかける……が反応はない。

「聞こえていようが、いなかろうがどうでもいいが。……フェイト。このままでいいのか？」

俺はフェイトに……人形なんかじゃないフェイト・テストロッサという人間に話しかける。

「このままではお前はプレシアの言うとおりでただの人形だ。」

フェイトは反応しない。ただただ、透き通った目で虚空を見つめている。

「お前の物語はこのまま、プレシアが握っているままなのか？……違うだろう？お前は这个世界に生き、そして思考している。そのお前が人形のはずがない。」

そうだ。这个世界は確かにリリカルなのは这个世界。アニメだったら、主人公は、なのはちゃんなのかもしれない。だけど違う。

リアル

这个世界は現実なんだ。ならば这个世界の主人公はなのはちゃんだけじゃない。

「这个世界の、この物語はお前も主人公なんだ。ならここでプレシアにあの言葉を言われた程度で止まっていたら、お前は本当に人形になってしまう。」

辛いかもしれない、苦しいかもしれない、フェイトじゃない俺にはその痛みはわからない。それでも！

「立て！フェイト・テストロッサ！立って母親に文句を言って来い！」

ぴくっ

俺の言葉にフェイトが反応した！頼む！このまま立ち直ってくれ。

「これは高町なのでもアリシア・テストロッサの物語でもない。」

そうだこれは。

「フェイト・テストロッサ。これはお前の物語だ。」

「……私の…ものがたり？」

「そうだ。そしてその物語はまだ始まってもない。」

「わたしは……」

フェイトが俺の言葉に完全に反応した。これなら……たぶん大丈夫だろう。

「私はプレシア・テストロッサの所へ先に行く。立ち上がれるなら追って来い。」

そう言って俺は部屋を出て行く。

side out

FATE side

母さんが言った言葉、私が大嫌いだって私はアリシア・テストロッサの偽者なんだって、そう言っていた。私は母さんに必要ないものだったのかな？私はアリシア・テストロッサに絶対に勝てないのか

な？

「これは高町なのはでもアリシア・テストロッサの物語でもない。フェイト・テストロッサ。これはお前の物語だ。」

「……私の…ものがたり？」

私の？アリシアのじゃなくて私の？

「そうだ。そしてその物語はまだ始まってもない。」

まだ始まってもない……だけど。

「わたしは……」

アリシアの……

「私はプレシア・テストロッサの所へ先に行く立ち上がれるなら追って来い。」

そう言って彼は出て行ってしまった。

母さんに？会う？……この物語は私の物語、私の物語はまだ始まってもない……。

「そうなのかな？バルディッシュ。私の物語はまだ始まってもないかったのかな？」

「GET SET」

バルディッシュはアックスモードになる。私に力を与えてくれる。

「あ……わかったよ。ユエ。私やってみる。」

side out

Precia side

早く、早く発動を……！？さっきより次元震の威力が……

（プレシア・テストロッサ！）

念話！？

（終わりですよ。次元震は私が抑えています。…駆動炉もうじき封印、あなたのもとには執務官が向かっています。）

まずい！執務官に捕まったらフェイトは……早く発動を！！

（忘れられし都アルハザード。そしてそこに眠る秘術は存在するか曖昧なただの伝説です！）

分かっているわ、そんなこと。

（違うわ…アルハザードへの道は次元の狭間にある。時間と空間が砕かれたとき、その狭間に滑落していく輝き。道は確かにそこにある！）

（ずいぶんと分の悪い賭けだわ。あなたはそこにいつて何をするの？失った時間と犯した過ちを取り戻すの？）

前はそうだったんだけどね。あの子が来てからずいぶんと私も変わったわね。

（そうよ！私は取り戻すの！私とアリシアの過去と未来を……。）

「取り戻すのこんなはずじゃなかった世界の全てを……なっ!？」

私の部屋は薄く、しかし強度の高い何かに覆われた。

「結界!？」

いったい誰が!？執務官が!？……いいえ…そんなのありえない。じゃあ誰が？

「ククク……世界はいつだってこんなはずじゃないことばかりだよ……か。」

「あなたは……ユエ!」

私の魔法によって墜ちてしまったはずの子がそこにいた。

「あなたが放った魔法、なかなか痛かったぞ？」

「……あなたには電撃が効かないから撃ったんだけどね？」

「……そういえば、そのよな設定だったな。」

「なによ。インチキだったの？」

「クク・・・まあそのようなものだ。」

私に落とされたことが、何でもないような言い方だった。

side out

yukito side

プレシアのいる部屋に来てチャクラで結界を張ったが、なぜかプレシアは攻撃の姿勢も見せずただ立っていた。

「それで？フェイトを突き放してどうする気だ？事と次第によっては、あなたを殺さなければならなくなるのだが？」

俺はフェイトをあんなにしてどうするのかを聞く。さっきまで話していたが、このプレシアならまだなんとかなるはず。

だが俺が聞いた言葉は予想だになかった言葉だった。

「もういいわ。私はフェイトに・・・娘に対して酷いことをした。・・・このままいてもフェイトは犯罪者・・・なら私が罪を引き受けて世界から退場しようと思ってね？」

「なに？」

まさかプレシアはフェイトの罪を自分ひとりで背負って逝くつもりか！？

「……思い直さないか？フェイトにはまだあなたが必要なはずだ。」

「無理よ。私はもう犯罪者。今更、ごめんなさいじゃすまされないわ。」

「しかし！」

「いいのよ。……私が死んだ後、フェイトを……娘を頼めるかしら？」

……プレシアの意思は硬そうだ。俺の説得ではてこでも動かないだろう。

「そうか……残念だ。」

なら俺に出来ることはただ一つ。……プレシア・テストロッサという犯罪者をここで殺すことだ。

魔法少女リリカルなのは月 16話

フェイトのためプレシアは死を選ぶ

ふざけるなよプレシア

フェイトのためにあんたには生きてもらわなきゃならないんだ！

魔法少女リリカルなのは月……はじまります

y u k i t o s i d e

……プレシアの意思は硬そうだ。俺の説得ではてこでも動かないだろう。……だけどな。

「そうか……。残念だ。」

ふざけるな。

「もういいわ。早く殺しなさい。」

あんたが犯罪者だというなら、その現実をぶち殺す！

俺は仮面をずらし、プレシアと目を合わせる。

「……………高科雪人が命じる。……我がここを去るまで
我に従え。」

「な！？……………はい。」

(ユエ!?!何なのこれは!?!あなたは一体私に何を!?!)

(ほう。まさか自我が残っているとはな……。まあ良い)

まさかギアスをかけても意識が残っているなんてね。コードギアス見たこと無いけどこれはおかしいのか?

俺はプレシアを無視して命令を下す。

「では、お前は私が次元震を引き起こせばアルハザードにたどり着けると言ったことにしろ。そしてそのことで私に騙されたという演技をしろ。」

「………はい。」

「結界を解く。解けたら演技を始めろ。」

(やめなさい!ユエ!)

プレシアの言葉は無視して俺は結界を解く。

s i d e o u t

A s u r a s i d e

プレシア・テストロッサと念話していたが急にそれが途絶え、ジュエルシードの魔力を感じなくなる。

「いったい何が起きているの?エイミィ!状況は!?!」

「プレシア・テストロッサがいる部屋の周囲に正体不明の強力な結界が張られています。その強度AAA+!」

「なんですって!?!」

プレシアが張った!?!いいえ、そんなことをするメリットは!?!

「あ!艦長!映像回復します!」

映像が回復する。

『うふふ……来たわねユエ……。』

『クク……プレシア。久方ぶりだ。』

そこには今回の事件の犯人とある少年が映っていた。

side out

Crono side

「くっ!なんて硬い結界だ!」

僕は今プレシア・テストロッサの部屋の前に来ている。だが部屋に入ろうとした寸前で強力な結界が張られ前に進めない。

「クロノ君!」

「君たち!」

どうやら高町なのはとフェイト・テストロッサ、そしてユーノ・スクライアも僕に追いついたようだ。

「すまない。あんな大口を叩いておいてこのざまだ。」

「あの、何が起こってるんでしょうか？」

「わからない。ただこの結果は僕じゃ破れない。それが現実だ。」

ユーノ・スクライアが質問してきたが僕にはそう答えるしかなかった。

『クロノ君!』

「なんだ!? エイミー!」

『結界が消えるよ!』

「なんだって!?!」

僕の目の前でエイミーが言うとおりに結界が消える。……罨か? プレシアは何がしたいんだ!?

「……考えていてもしょうがない。結界がなくなった! みんな突入するぞ!」

「「「はい!」」」

僕は目の前にある扉を吹き飛ばし中に入る。

そこには

「うふふ……来たわねユエ……。」

「クク……プレシア。久方ぶりだ。」

プレシアと一緒にユエがいた。

「なっ!?!……ユエ! どうして君がここに!」

「ユエさん!?!」

「ユ……エ? どうして?」

どうやら高町なのはとユーノ・スクライアは僕と同じ心境のようだ。

「あらあら、うるさい羽虫が来てしまったようよ?……まあいいわ。さあ、ユエ。このジュエルシールドとあなたの持っているジュエルシールドでアルハザードへの道を!」

「なっ!?!」

しまった! まさかユエとプレシアが繋がっているなんて!

そんな僕の思考を無視してユエはジュエルシールドを取り出しプレシアに渡す。

「ユエさん! ダメです!」

「うふふふ……これで……アルハザードへの道が!?! さあ、ユエ! あ

なたの力で道を開きなさい!!」

「やめるんだ! ユエ!」

そう僕がユエを止めようとした時にそれは起きた。

「ククククク……」

ユエが突然笑い出す。あたりがシンとなりここにはユエの笑いだけが響く。

「な、何が可笑しいの!?!」

プレシアでさえもユエの行き成りの態度の変化に戸惑っている。

「クハハハハハ……バツカじゃねえの?」

「なっ!?!」

「ククク……まさかこんなにも簡単に踊ってくれるなんてな? 私も驚いたぞ?」

「どういうこと!?!」

「あなたに言ったな? アルハザードにたどり着ければアリシア・テスタロッサを生き返らせることが出来ると。」

「……そうね。あなたはそう言って私にジュエルシードを集めるように言ってきたわ。」

そんな経緯があつたのか：

「ククク……あれは嘘だ。」

「なんですって!？」

「なんだと!？」

「考えてもみろ。進化しすぎたことによつて滅んだとはいえ人間がそんな技術を開発できていると思うか？あれは貴様にジュエルシードを集めさせるためについた嘘だ。」

「嘘よ……そんな……」

「お陰で簡単にジュエルシードを集めることが出来た。例を言おう。」

「くっ!ふざけないで!よくも騙してくれたわね!？……ここで死になさい!」

そう言つてプレシアは魔法をユエに放つ。

「ふん……くだらんな。」

「なんですって……?」

それはユエが前に出した右手に当たっただけで消滅した。

「そらお返しだ。テオザケル!」

「なっ!?! ああアああああアあああ!?!」

「母さん!」

ユエの腕から、巨大な雷撃が放たれプレシアを直撃する。

「クク……さあ来いジュエルシード。私をアルハザードへ導け!」

「なんだって!?! アルハザードに君は何を!?!」

「冥土の土産に教えてやろう。アルハザードにはな? 究極の魔法があるらしいのだよ。」

「究極の…魔法?」

「そう。すべてを無に帰し消滅させる『極大消滅呪文・メドロア』それがアルハザードにはある。」

「それを手に入れて! 君は何をするつもりだ!?!」

「決まっている。それだけの力があればすべてを手に入れることすら可能。私は、それで世界を手に入れる。」

「なに!?!」

「今の私は気分が良い。プレシア・テストロッサ褒美をやろう! トレース・オン」

その言葉とともにユエの手に時計のようなルーレットのような物が左手に現れる。

ユエは何も言わず無言でプレシアに杖を向ける。

「10年の時を記憶を持ったまま遡れ！タイムマジック！」

プレシアは一瞬光に包まれる。

「な！？私になにを！？」

「黙っていたまえ。」

ユエは右手をアリシアに向け呪文のようなものを唱える。

「その御名において生命の炎尽きたるこの者の身に魂を甦らせたまえ
ザオリク！」

その言葉とともにアリシア・テストロッサが光り輝く。僕は眩しくて目を瞑ってしまう。

「……アリ……シア？」

目を開けたときに僕が見た光景はたぶんこの先一生忘れることがないだろう。

「な……に……？」

「そん……な……」

僕も高町なのはも驚いている。

「ありえない。」

「アリシアが…」

ユーノ・スクライアは目の前の現実を否定し、フェイトはただただ
啞然として目の前の光景を見ている。

「お母…さん…」

死んだはずのアリシア・テストロッサが目を開けたという光景を

「アリシア…アリシア！」

プレシアはアリシアのポットを開けてアリシアを抱き寄せる。

「お母さん…痛いよ…」

「アリシア。アリシア。」

感動的なシーンだがそれよりも僕はやることもある。

「ユエ！プレシア・テストロッサを示唆した事について、アースラ
まで同行してもらおうか。」

side out

yukito side

うむうむ。感動的なシーンだ。俺泣いちゃいそう。

だがこの感動的なシーンに水を注すやつがいた。

「ユエ！プレシア・テストロッサを示唆した事について、アースラまで同行してもらおうか。」

そう。我らが空気読めない子クロノ・ハラオウン君（14）である。

「クク……悪いがもう行かなくてはならないのでね？私は退場させてもらおうよ!!」

俺はそう言ってジュエルシードの出力に俺の魔力を加えて、次元断層が起らないところで発動する。

ゴゴゴゴゴ!

地震のような地響きがして時の庭園に亀裂が走る。そしてリンディさんのデイストーションフィールドがなくなる。

「さて、では私は行かせてもらおうよ?」

地割れが俺の下でおきる。ピキピキと音を立てながらどんどんその範囲を広げる。

「待て!ユエ!」

「ユエさん!ダメー!」

「ユエさん!」

「ユエ!」

クロノも、なのはちゃんも、フェイトも、ユーノも俺の仮の名前を呼ぶ。

（やめなさい！ユエ！）

なんとプレシアも言ってきた。俺、結構愛されてる？

（大丈夫だプレシア。私は死なん。）

（そこは落ちたら魔法が使えない場所なのよ！？）

（問題ない。あなたは私に騙されていたと管理局には言え。そうすればあなたの罪は限りなくゼロになるはずだ。）

（あなた……そこまでして…）

（別にあなたのためじゃない。フェイト・テストロッサ。彼女のためだ。あなたは2人の娘と一緒にいればいい。ではさらばだ）

「それでは最後の命だ、我の名を忘れろ。プレシア。

プレシアに最後の命令を出す。その瞬間地面が割れ、俺を飲み込む。

「クククク……クハハハハ！」

俺は落ちていく次元の狭間へ……。

《完》

はいはい。そんなことないからね？

え！？何！？2度ネタ厳禁！？何を言ってるんですか！お笑い用語で天どんって言ってる？同じネタを繰り返すのはお笑いのきほ……そんなこと聞いてない？

俺が落ちた割れ目が遠くなっていく……もう肉眼ではほとんど見えない。

「帰るかな……ジャンプ。」

俺はボソソジャンプを使って家にジャンプする。

side out

nanoha side

「ユエ……さん……」

ユエさんが落ちていく。魔法が使えない虚数空間へ。

「ユエ！」

プレシアさんがアリシアちゃんを離してユエさんが落ちた穴に駆け寄る。……え？プレシアさんがアリシアちゃんを離す？

（お願いみんな！脱出、急いで！）

「急いでここから脱出するんだ！プレシア・テストロッサ、あなた

もだ。」

「……わかっているわ。…行きましょう。早くしないとここも崩れる。」

私の疑問は脱出の事で一時保留となった。

s i d e o u t

F A T E s i d e

今私はアースラにいる。クロノさんはエイミィさんに包帯を巻いてもらっていて、高町なのはユーノ・スクライアに回復魔法をかけてもらっている。そして私の目の前には……母さん…プレシア・テスタロッサが私を見ている。

緊張で体が震えて汗が出る。手が震えて足がすくむ。でも母さんに言いたいことがあるんだ！

「母さん。」

びくっ！

母さんは驚いたように身をすくませる。

「あなたに言いたいことがあります。」

「…………。」

「私は…アリシア・テスタロッサじゃ「もう…いいわ」…っ！」

拒絶された……やっぱりアリシアじゃないとダメなのかな？

そう考えたとき私を暖かい何かが包み込む。

「ごめんなさい……フェイト……あなたにはつらい思いをさせたわね……」

「…母さん？」

「ごめんなさい、酷いことをして。ごめんなさい、あなたをちゃんと見てあげなくて。ごめんなさい、あなたは人形なんかじゃないわ。ごめんなさい……うう。」

母さんが泣いている……どうして？

「お母さん、どうしたの？何で泣いてるの？」

アリシアがお母さんに質問する。私も同じ疑問を持っている。母さんにとって私は人形なんじゃないの？

「……何でもないわアリシア。ほら、この子が私たちの新しい家族よ。」

「え……？」

母さん今なんて？

「家族？」

「そう、あなたの妹のフェイトよ。」

「私の妹…フェイト…」

私が母さんの家…族？アリシアの妹？

「フェイト。」

「は、はい！」

「あの…あなたにはいっぱい酷いことをしてきたわ…それで…その…あなたがいいと思うなら…私のことをまた、母さんと呼んでくれないかしら？私の娘として。」

「あ……」

母さんが私を認めてくれた。

「はい！」

そのときの私の笑顔は1番いい笑顔だったと後になのはが言っていた。

魔法少女リリカルなのは月 16話（後書き）

こんにちはDiabolusです。

皆さん季節の変わり目で調子を崩したりしてないでしょうか。気を付けてくださいね。

今回の話ですが少し突飛過ぎましたかね？

所々おかしなところとかありそうですが……

やっと心が通じ合ったプレシアとフェイト。この二人の罪状なんかはまた次回……かも。

では次回も異世界冒険譚にズームイン！！

A・S プロローグ

y u k i t o s i d e

虚数空間から帰還した俺はリビングに行き同居人に声をかける。

「ただいま。無印、終了したぞ。」

「おう。お帰り。こっちは何事もなかった。強いて言えば、次元震が起こったときにアリサが抱きついてきたぐらいだ。」

「なに！？マジで！？うらやましい……。」

「バカ言うな。どうせ戻れば記憶は統合されるんだから良いだろ？」

「まあ、そうなんだけどさ。」

この同居人の名前は高科雪人という。というか俺の影分身だ。つまり、俺の目の前には姿形、声、名前まで同じ人間がいる……うん。カオスだ。

「じゃあ影分身解除するぞ。」

そうやって俺は影分身を解除する。

お馴染みの『ボフン！』という音がして、影分身が消え、記憶が流れ込んでくる。

おお！アリサが抱きついてきてる！しかもその後「べっ別に」ってセリフが！みなぎってきた！！

おっと見苦しい所を見せたな。あぶなく釘宮病が発症するところだったぜ！

「さて、次はA、Sか……図書館に行こう。」

記憶の整理を終えて、俺は八神はやたと仲良くなるために図書館へ向かう。

図書館に着いた俺は自分が借りる本を探すついでに八神はやてを探す。

「よし。まずはラノベのある場所に行こう。きっとそこにはやてはいるはずだ（笑）」

居るわけないか。そんな冗談を考えながらラノベのコーナーに行く。

「……うそだろ？」

そこに車椅子に乗った茶色い髪の子がいた。おそらく歳は俺の身体年齢と同じだろう。

というか八神はやてがそこにいた。さて、会ったは良いけどどうやって話しかけようか？

「さてどうしようか別に彼女は……おいその君……本を取って欲しいわけでも……「もしもし？」……いや、ここはナンパみたいな感じ……」「聞かんかコラ。（ズビシッ!）」……なにしがやる豆だぬ

き…」

俺の目の前には八神はやてが立っていて本の角を俺の頭にぶつけている状態だ。……何がどうしてこうなっている。

「いきなり初対面の人間を豆だぬき呼ばわりとは酷いやんか！こんな美少女を捕まえて。」

「美少女？どこにそんなのが？」

俺は辺りを見回す。居るのはおっさんにおばさんに豆だぬきだけだ。

「あんた失礼な人やな…まあええわ。」

何がまあいいのかさっぱり分からないけど。

「君は何でここに居るん？今日は学校がある日やで？この辺の学校からじゃ鞆置いてから来るのは無理があるやん。」

なるほど、そういえば普通に帰ったらこの時間じゃここに来るのは無理だな。

「はっ！まさか君、不良なんか！？いかん！この歳からぐれるなんてお母さんそんな子に育てた覚えはないで！」

「誰がお母さんだ。それを言ったら君だってそうだろう？そんな歳からぐれるなんてお兄さん以下略。」

「私はええんよ。……学校行けへんから。せやから友達もおらん。」

「それは……すまない。」

すごく気まずい雰囲気になる。何とか打破したい。そうだ！

「あゝっと。自称美少女さん？俺の名前はたかしなゆきと高科雪人って言うんだ。この町一番のジェントルマンと巷で噂されている。それでだな……友達にならないか？」

八神はやては一瞬唖然とした表情をした後、不敵に笑ってこう言い返してきた。

「はじめまして自称この町一番のジェントルマンさん。私の名前は八神はやて。宇宙一の美少女や！……友達になろうか？」

それが八神はやてと俺の出会いだった。

A・S プロローグ（後書き）

こんにちは作者です。

もう半年くらいでしょうかお久しぶりです。

久しぶりに投稿してみました。とりあえず続けるつもりなので暇があればみてください。

魔法少女リリカルなのは月 A・S

y u k i t o s i d e

はやてと会ってから2週間が経った。

俺は今、はやての家に来ている

「そういえば……さ！」

俺が落ちながら蹴りを放つ

「なん……や！」

はやてはそれを避けながら光線を放ってくる。

「はやての誕生日って……いつ!？」

俺は光線を跳ね返して跳び、はやてに蹴りを放つ。

「ああ!……明日……や！」

はやては俺の蹴りを食らうが体勢を立て直し、俺を掴み投げた。俺は大きく吹き飛ばされる。

「え!?! 明日!?! あ……ああ……!!」

俺は驚いてはやての方を見てしまい、それが致命的な隙になった。

「ふっわたしの勝ちやな？」

「ファルコがー！」

どうも高科雪人です。ただいま大乱闘をプレイ中です。はやてにメテオされました。畜生。

「そんなことより。明日なのか？誕生日」

「そうやよ？」

ちなみに今日は6月3日だ。

「何で事前に言ってくれないんだ。プレゼント、用意出来ないじゃん」

「いやー。なんか自分の誕生日を言うのってプレゼント催促してるみたいで悪いじゃん？」

「そんなことねーよ。どうすっかな？」

「せやからええって」

はやては手をパタパタ振って遠慮する。

「いいや！歳を取ってババアになりたくない気持ちは分かるが、誕生日は祝わないとダメだ！」

「誰もそんなこと言ってへん！」

はやてが反論してくるが俺はかまわず続ける。

「そんな誕生日に歳を取る悲しさしか知らない小学生にしてもう枯れかけているはやてに、俺は誕生日の良さを伝えたい！」

「誰が枯れてるんや！」

「そう言う訳で今日ははやてちゃん家に泊まりたいと思います！」

「前の話と全く話が続いてへん！？・・・と言うかユキ。泊まるにしても、パジャマはどうするん？そのまま寝るとばっちいで？」

はやてがちよっと嫌そうに聞いてくる・・・が！

「抜かりは無い。ここにパジャマがある」

そう言って俺は影のゲートからパジャマを取り出す。

「なんやて！？どこから出したんや！？」

「ジェバンニが一瞬で持ってきてくれました」

「そんな説明でええんか！？ってかジェバンニって誰や！」

ん？デスノートってこの世界だとやってなかったっけ？ まいっか。

side out

hayate side

今日はわたしの誕生日の前の日。明日は検査があつて誕生会出来へんって言ったらユキが今日は泊まって明日の誕生会を今日やっちゃおうって言ってきた。

ユキが来てから毎日が楽しみで一人で家に居てもユキを待ってるだけで、時間がどんどん過ぎてしまう。

今日はユキと一緒にゲームもした、料理も一緒に作った。ユキは意外と料理が出来る。男の子やから出来へんかな？って思つとったけど・・・

一緒に作った料理を食べてテレビを見たりしていたらいつの間にかもう夜になつとった。

一緒にお風呂に入ったりもした。ユキが「落ち着け……俺……俺はそんな奴じゃないだろ……」っていつとったけど何なんやろ？色々なことをしている間にも楽しい時間はどんどん過ぎていく。

こんなに楽しくてええんかな？ふいに、わたしはこれが全部夢なんじゃないかと思つてしまった……

わたしは怖くなってユキの服を掴んでしまう。

「ん？どうした？」

「……ううん。何でもないよ？」

わたしが何でもないようにするとユキは困った顔をして

「はやて。何でも溜め込むのは良くないよ。大丈夫、俺はここにい

るから」

「ユキ……」

ありがとうな？ 本当に。

「さて！もう寝ようか？」

「そうやな」

「じゃあ、はやての部屋に行こうか。」

私は雪人に私の部屋に連れて行ってもらった。

「あっ……もう12時や。」

「本当だ。……じゃあもうすぐあいつ等が……」

雪人が小さい声で何か言った。

「え？ユキ。なんか言った？」

「ん？なんでもないよ。」

そう言ってユキはわたしをだっこしてベットに乘せてくれた。
その瞬間。部屋が紫色の光に染まる。

「……え？」

わたしは光が出ている方を向くと、昔からあった本が光を放ってい

る。

本がこっちに来る……浮かびながら。

「封印を解除します」

（なんなんや？ いったい何が……）

わたしの体から何か光の玉のようなものが出て、本に向かっていく。そして光の玉が本に吸い込まれたとき、本から一段と強い光が放たれて……

side out

yukito side

目の前の本、闇の書から光が放たれる。

光が収まったとき俺の目の前には4人の人間がいた。

「夜天の書の起動を確認しました」

バトルマニア、おっぱい魔人の名前で親しまれている将シグナム。

「我ら、闇の書の蒐集を行い、主を守る守護騎士にございます」

ドジッ子シャマル、シャマルクツキングで有名な泉の騎士シャマル。

「夜天の主の元に集いし雲」

犬の愛称で親しまれている、盾の守護獣ザフィーラ。

「ヴォルケンリッター、何なりと命令を」

エターナルロリータ、勇者王の称号を持つ鉄槌の騎士ヴィータ。

「……ん？な！？」

どうやらはやてが何も言わないので疑問に思ったヴィータが顔を上げ驚く。

「貴様……何者だ？主に何をしている。」

シグナム達も顔を上げて敵意を新たにしている。

今の俺の格好ははやてをだっこしてベットに降ろすところなのだが、彼女たちから見たら不埒な奴が主に手をかけようとしてるようにか見えないだろう。俺とはやてはどう見たって家族には見えないし。

そう思ったので誤解を解くためにはやてから手を離すが……

「てめえー！主に何やってんだ！」

ヴィータがアイゼンを起動して俺に殴りかかってくる。

いきなりの攻撃で初動が遅れた俺と、すでに武器を振りかぶっているヴィータ。

ここまでであれば俺はヴィータに殴り殺されているだろう。しかし、俺の腕は無意識に動いていた。

左腕は左上に構え、右腕は右下で構える。つまり天地魔闘の構えだ。ヴィータのアイゼンが振り下ろされる。

「な!?!」

ヴィータが驚いている。当然だろう。何せ魔力を全く纏っていない状態でアイゼンを受け止めたのだから……いや受け止めたというより右手を犠牲にして防いだことに驚いているのだろうか?

生々しい音がして俺の右手は肘の一手手前で碎け折れる。

俺は構わずヴィータに左手を振り下ろす。魔力も何も無いただの手刀だが、首に当たりヴィータをよろめかせる。

「ディバインシューター……」

「がっ!?!」

碎けて見るも無惨になった右手の手のひらをヴィータに当ててゼロ距離でディバインシューターを放つ。魔力がEランクしかなくても、騎士甲冑を着ていないヴィータにとっては成人男性に殴られたレベルだろう。

そのままヴィータは倒れる。

「な!?! 貴様!」

ヴィータが倒されたことに驚いたようでシグナム達が戦闘態勢に入る。

「待て、話を聞け。君たちの主には何もしない。」

「……悪いがヴィータを倒した者の言うことなど素直に聞く訳にもいかん。」

このセリフに俺はちよつとイラッときちゃったんだ☆

勘違いしてきたのはそつちで、ヴィータは勝手に突っ込んできてやられただけなのに……

「そうか……」

俺は魔力を全開にする。今の俺のランクはA Aランク位だが脅しには十分だ。

「な!？」

「動くな」

俺は剣を投影してシグナムたちに1本ずつ、ヴィータに3本の剣を向ける。

「動けば貴様らはもちろん貴様らの大切な仲間も殺す。……まあ勝手に勘違いしてやられたんだ。たいては強くない仲間だったのだろう? 動いたら私が殺してやろう。どうだ? 私は親切だろう?」

「……貴様……」

「おお、怖い怖い。そこを動くなよ?」

そう言って俺ははやての方に近づいていく。

「貴様！主に何をする！」

シグナムの言葉を見殺して俺ははやての肩に手をかける。

「やめろ！」

「おい。はやて。起きろ」

そう言っではやての肩をゆする。

「……は？」

シグナムが呆けているがどうでもいい。スルーしておこう。

「うーん。もう食べられへんよ」

「ドラザキッドか！」

もう少し揺すっているとようやくはやてが起きる。

「うーん？ユキどないしたん？」

「どうもこうもない。こいつらに俺とお前との関係を教えてやれ」

「いやん。関係やなんて……彼女って紹介して欲しいならそういえばええのに……／＼」

「顔を赤らめるな。クネクネするな。状況をよく見ろ」

「ん？状況って……え？」

はやての目が大きく見開く。相当驚いたようだ。

「理解したか？」

「ユキ……手が……手が！」

「ん？手がどうかしたのか？」

俺ははやての手を見てみるがなんともない。

「わたしのやなくて……ユキの手が……」

「俺の手？……あ」

手が……潰れていた。ものの見事に。粉碎という言葉が一番似合うんじゃない？ってくらいに。

「……痛ったー！ー！！」

痛みで転げまわる。ヴォルケンリッターに注意をはらえないくらい痛い。

「ユキー！死ぬな！死んだらダメや！」

「……ああ。はやて。俺、この怪我が治ったら両親に怪我が治ったって報告するんだ」

「ダメや！ユキ！それは死亡フラグや！」

「……がくっ……」

「ユキ……!!」

結局事態が収束したのはそれから2時間経った頃でした。

魔法少女リリカルなのは月 A・S (後書き)

地震や原発の事で日本は大変なことになっている。

俺たちに出来ることは何か？

募金とか自分に出来ることしか出来ない。

だから俺はここでSSを載せるぜ！ 日本頑張れ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2409/>

異世界冒険譚

2011年6月11日11時46分発行